

〔新出〕 石井鶴三宛中里介山書簡四十通 翻印と註釈

——『大菩薩峠』 関連書簡を中心に

一、はじめに——石井鶴三関連資料

二〇一〇年四月、「石井鶴三関連資料」が信州大学に寄贈されたことを契機として、当時信州大学人文学部に所属していた松本は、信州大学附属図書館からの依頼により、書簡の整理に関わることになった。<sup>1)</sup>彫刻家・洋画家・版画家として知られる石井鶴三（明治二十年（昭和四十八年）は、新聞連載小説の挿絵をはじめとして、文学作品の挿絵・装幀などの仕事も多い。そのこともあって、挿絵や装幀、さらには出版文化に関わる調査・研究を進めてほしいというのが、図書館サイドの意向であった。書簡点数が多く、執筆者・執筆時期も多岐にわたることから、荒井真理亜、高野奈保、多田蔵人、出口智之の四氏に協力を仰ぎ、これまで石井鶴三宛書簡の調査・翻印を進めてきた。<sup>2)</sup>そうした中、重要な資料としてはやくから注目してきたのが、

荒井 真理亜  
高野 奈保  
多田 蔵人  
出口 智之  
松本 和也

今回紹介にこぎつけた石井鶴三宛中里介山書簡である。<sup>3)</sup>ここで紹介する書簡は、中里介山『大菩薩峠』に関するものを多く含むが、同作の挿絵は、後に「挿絵事件」<sup>4)</sup>（昭和九年）を引き起こしてもいく。好評を博した『大菩薩峠』挿絵を石井鶴三がまとめて出版しようとした際、中里介山が、挿絵の著作権は小説本文の書き手（自分）にあると主張して起訴したのだ。この事件は、新聞・雑誌で話題となり、鶴三（挿絵）サイドによりそった議論が大勢を占める中、介山が起訴を取り下げることと落着をみた。今日では、一連の報道・議論を通じて、挿絵・挿絵画家の社会的地位の向上が果たされた、と評価されている。

もとより、挿絵の著作権が、挿絵を描いた挿絵画家にあるというのは、今日の感覚からすれば自明に思われる。ただし、以下の「二、石井鶴三宛中里介山書簡」に読まれるとおり、挿絵に関する介山からの書簡には、詳細かつ具体的な指示・図が多

く、その多くが鶴三挿絵に反映されてもいく。こうした事実は、おそらく「挿絵事件」の捉え方を考え直す契機となるはずであるし、大正末期～昭和初期における小説家と挿絵画家の関係を示す、貴重なケースであることは間違いない。

こうした重要性に鑑み、石井鶴三宛中里介山書簡四十通について、調査メンバー五名の共同作業によって書簡を翻印し、註釈と書簡画像、さらには言及された鶴三挿絵を付して、ここにまとめて公開することとした。

なお、書簡の翻印に際しては、以下の原則に従った。

- 一、原則として原簡に忠実に翻字し、仮名遣い、漢字の誤りもそのまま残す。仮名の清濁も原簡のままとする。
- 一、仮名については、変体仮名は通行の字体にあらためる。片仮名を平仮名とすることは原則として行わないが、助詞の「ハ」「ニ」についてのみ、変体仮名の一種とみなして平仮名にあらためる。  
「トモ」「コト」「より」「甘」「卅」等の合字は開く。
- 一、漢字については、常用漢字・人名用漢字の字体を用いる。異体字・同字・俗字等は、すべて現行の字体とするが、別字であるものは原則として改めず、数字の大字（壺・拾・阡など）も、そのまま表記する。
- 一、文字が塗りつぶしてあって判読不能な場合は●で、判読可能な見せ消ちは、その文字に取消線をかけて示す。なお、どちらの場合においても、筆者による訂正がある場合には、書加えられた文字を「」内に示す。
- 一、欠・蝕・濡れ等によって判読不能な文字は□で示す。なお、字が強く推定できるものについては、□の右傍の「」内に

「カ」を附して示す。

一、判読できなかった字はⅡで示す。

一、翻字者による註は≧≡の中に示す。

一、尚々書は、書簡中のどこに記入されていても、本文最終行の後ろに記す。

また、各書簡には、すでに信州大学附属図書館によって整理用の仮番号が付されているが、本稿ではそれをパーレン内に残し、改めて制作年順に書簡1～40と書簡番号をふり、配列することとした。書簡本文の翻印を示した後に註を付し、書簡画像を掲げることとした。また、その後に、書簡・註で言及された『東京日日新聞』に掲載された鶴三挿絵の当該回を示し、書簡との対比ができるようにした。

#### 〔註〕

(1) 寄贈の経緯および「石井鶴三関連資料」については、『信州大学附属図書館研究』第一号掲載の各論を参照のこと。

(2) その成果は『信州大学附属図書館研究』に発表され、ネット上で閲覧可能である (<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/publication.html>)。

(3) 本稿で紹介する書簡のうち三通は、松本「墨画小品展と「大菩薩峠」挿絵——新出石井鶴三宛中里介山・西田武雄書簡から」(『信州大学附属図書館研究』平成二十六年一月)で翻印を示した(書簡25・28・29)。

(4) 詳細は、本臨時増刊号に掲載されている、出口智之「新聞小説と挿絵に関する問題系——「大菩薩峠」をめぐる石井鶴三宛中里介山書翰から——」参照。

(松本和也)

## 二、石井鶴三宛中里介山書簡

書簡 1 (高 1—20)

拝啓

御絵は内外共に非常に好評で私共<sup>マ</sup>も深く感謝致し居<sup>マ</sup>ります。

おたづねの蘭燈は色つぽい燈といふ位にお考へ下さ

れ度、《図》<sup>(2)</sup>こんは<sup>(2)</sup>な<sup>(2)</sup>や

うなものでいかゞかと思ひます、

旅へ出かけた時の兵馬<sup>(3)</sup>は羽織へ袴<sup>(4)</sup>わらじ脚絆で合羽<sup>(4)</sup>はなく、

社務所から出た時へはじ

めて合羽にし、その時は袴は

穿いてゐても足は足駄<sup>(5)</sup>が

けにしていたゞきたうございま

す、

またその時の提灯へ六所明

神<sup>(6)</sup>の定紋、即ち左巴《図》

をつけていたゞきたう

ございます、

第二の処場面<sup>(7)</sup>、炉辺の処自ら鬼氣

巻紙 毛筆

人を襲<sup>マ</sup>うものがあつて見るほ  
 どの人が感動して居りました  
 第三の露出した龍之助、

慾を云ひますと、もう少し  
 痩せて、ほとんど病人上り  
 の心持で、たぶさがもう少し  
 小さく、面はもう少し弱々  
 しく、庫稿のせい六つかしく  
 云へば全体をやゝ神秘的に  
 切味が露出しないやうに  
 との心持で居ります原稿  
 がソマツの出来でこんな事  
 を申しては恐縮ですが  
 第三回<sup>(8)</sup>のはやゝ機鋒が露出  
 し過ぎた傾があつたかと存  
 じます。

それから第八回<sup>(9)</sup>の七兵衛<sup>(10)</sup>は  
 額に皺<sup>しわ</sup>のない程度がよろし  
 いと存じます。

なほ何かと妄言を申上げ  
 るつもり 先は悪しからず

早々不備

十三日夜

山より歸りて 中里生

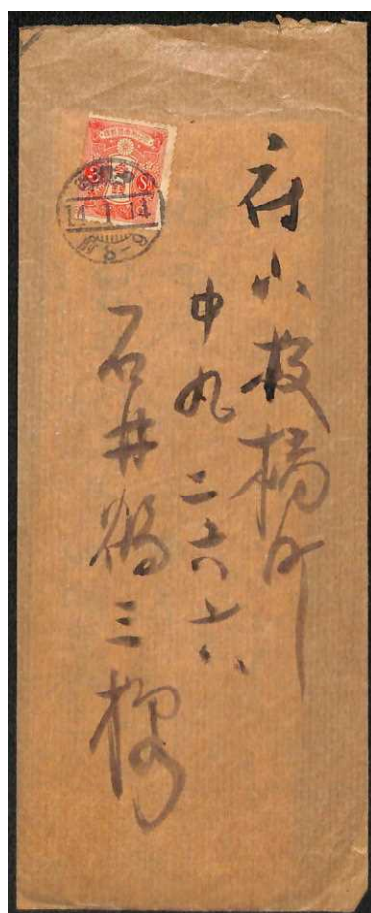
石井画伯

侍史

〔受信者〕 府下板橋町／中丸二六六／石井鶴三様  
 〔発信者〕 早稲田つる巻町／遊於舎にて／中里生  
 〔日付け〕 《記載なし》  
 〔消印〕 早□□／14・1・14／前8―9

〔註〕

- (1) 美しいともしび、美しい灯籠の意。
- (2) 「無明の巻（十七）」（大正十四年一月二十四日夕）掲載。
- (3) 『大菩薩峠』の物語の発端となった御岳山の奉納試合において、机龍之助に頭蓋骨を割られた死んだ宇津木文之丞の弟。兄の仇を討つべく、出奔した龍之助を追って旅に出ることになる美少年剣士。「無明の巻」では、吉原の女郎東雲を身受けしようとして登場する。
- (4) 「無明の巻（十九）」（大正十四年一月二十七日夕）掲載。
- (5) 東京都府中市にある大国魂（おおくにたま）神社のこと。
- (6) 「無明の巻（二十）」（大正十四年一月二十八日夕）掲載。
- (7) 「無明の巻（二二）」（大正十四年一月七日夕）掲載。
- (8) 「無明の巻（二三）」（大正十四年一月八日夕）掲載。
- (9) 「無明の巻（八）」（大正十四年一月十四日夕）掲載。
- (10) 裏宿七兵衛。「甲源一刀流の巻」から登場する人物で、「持つて生れた泥棒癖」と「一晩に五十里は楽に走る足」（『大菩薩峠（五十五）』、『都新聞』大正二年十一月四日）をもつ。当該場面では、登場人物名は明らかにされていない。







「無明の巻 (20)」



「無明の巻 (17)」



「無明の巻 (2)」



「無明の巻 (19)」



「無明の巻 (3)」



「無明の巻 (8)」

## 書簡2 (高1—269)

葉書 毛筆

新出の人物 三十三回まで、

お松<sup>(1)</sup>——兵馬より一つ年下、

お屋敷風の少女、少し賓の張つ

た高<sup>たかまけ</sup>島<sup>しま</sup>に<sup>(2)</sup> 矢がすりか何か然る

べき衣類

《図》

でも、もう少し略装でも

よろしいと思ひます

過日 龍之介の

御意見現実●と理想との相違と存候

いづれ 後便

浅草観音参詣の兵馬は羽織袴に下駄穿<sup>(2)</sup>きで

「受信者」市外板橋町／中丸二六六／石井鶴三様

「発信者」中里生

「日付け」二十九日

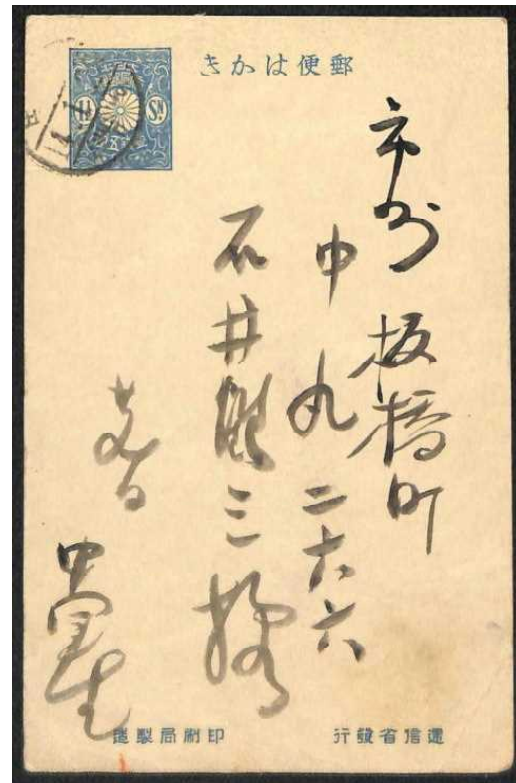
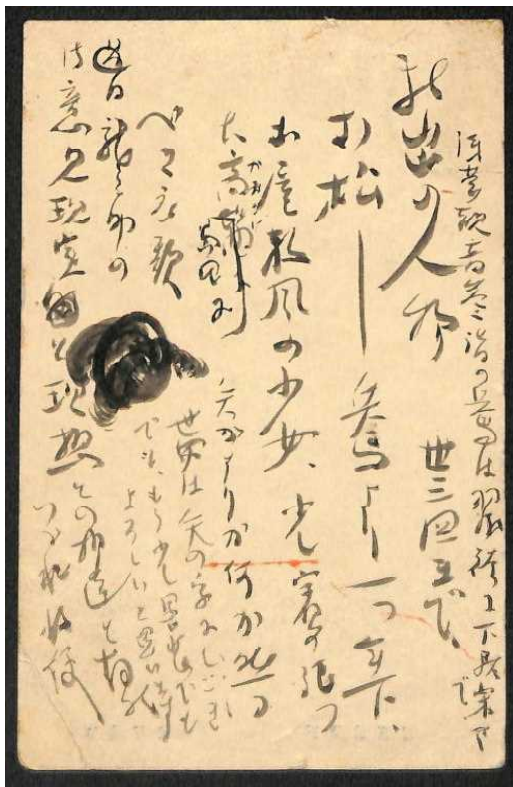
「消印」□□田／14・1・2□／□□—□

〔註〕

(1) 『大菩薩峠』の冒頭において、大菩薩峠の上で机龍之介に斬り殺された老巡礼の孫娘。偶然通りかかった裏宿七兵衛に助けられるが、その後も奉公先の神尾主膳の屋敷で危険な目に遭ったり、叔母に京の島原へ売ら

れたりと様々な悲運に見舞われる。「無明の巻」の挿絵でお松が新出するのは「無明の巻(二十七)」(大正十四年二月五日夕)。中里介山の指示に従って描かれたと思われる挿絵が掲載されるのは「無明の巻(三十三)」(大正十四年二月十二日夕)。

(2) 「無明の巻(三十一)」(大正十四年二月十日夕)掲載。



「無明の巻 (31)」



「無明の巻 (27)」



「無明の巻 (33)」

## 書簡3 (高1—268)

葉書 毛筆

新出の人物

道庵先生<sup>(1)</sup>中老 (玄人医者)<sup>(みしや)</sup>

茶せん頭

に願ひます

《図》

浮世絵

アの時代では

歌川豊広<sup>(2)</sup>が私は一ばん好きです

先は

〔受信者〕市外板橋町／中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕中里

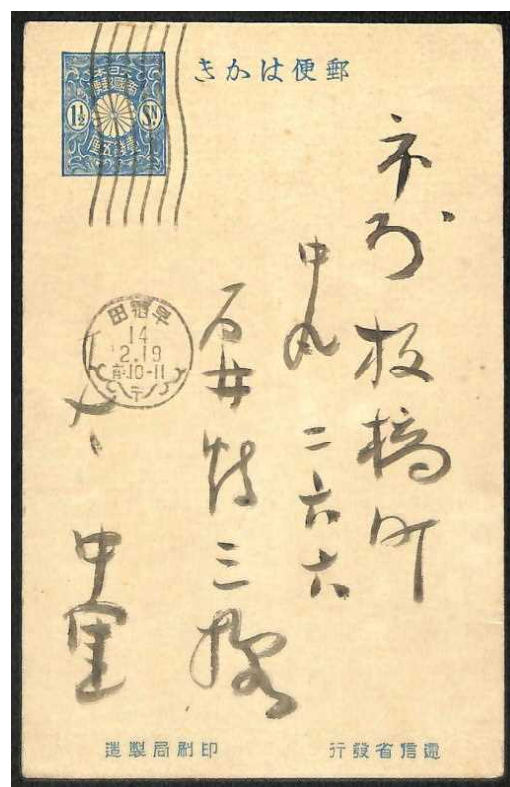
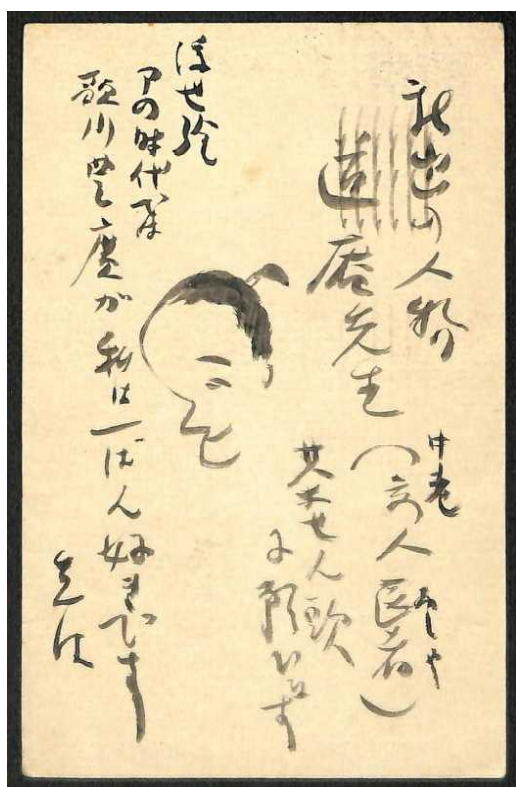
〔日付け〕十九日

〔消印〕早稲田／14・2・19／前10—11

〔註〕

(1) 「無明の巻 (四十七)」 (大正十四年二月二十八日夕) 掲載。江戸下谷長者町の医者。金持ちが嫌いで、裕福な患者の治療は断る。貧しい患者からは薬料を十八文しか受け取らないので、「十八文道庵」と呼ばれている。大酒飲みで該当回でも酔っ払って登場。

(2) 歌川豊広 (安永三年〜文政十二年)。江戸後期の浮世絵師。号は一柳斎、一龍斎。歌川豊春の弟子で、同門の歌川豊国と並び称された。草双紙や読本の挿絵を描いて活躍。初代・歌川広重の師でもある。





「無明の巻（47）」

## 書簡4 (高1—19)

巻紙 毛筆

守貞漫稿<sup>(1)</sup>は無二の  
珍籍で小生も座右を  
離しません—御覧  
でもございませうが帝国  
図書館の原本を見ますと  
編著者のこくめいに驚  
きその肉筆のあざやかさ  
に打たれ本そのものがまた  
珍重すべき芸術となつて  
居ります、

さて新出の人物は  
宇治山田の米友<sup>(2)</sup>

この輪廓を申し上げますと、  
身の丈は四尺年齢は十九、  
髪は蓬髪、面は童顔なる  
が如くして額に皺あり肉体  
は筋骨鉄片を叩きつけたる  
如くして肥大ならず天性  
槍術に妙にして道義的に  
激昂し難<sup>(易)</sup>き人物充分に  
グロテスクを恣に致し下され  
度手に仕込槍(身の丈に相  
応し)一見棒の如く)を持つ  
てゐる、衣服は黒の筒袖など

次に例の

机龍之助

これは今後に於て夢幻的に  
表現して行きたい小生の希望  
で—ちよつと具体的に申し上げ  
る事に苦みますが、云はゞ  
仁木弾正<sup>(3)</sup>の床下の引込一卷  
をくわえて花道を歩む時分  
の気分のやうな処を御参考  
に—~~それは拙作其他~~—と(とも)思  
つて居りますが御賛成を得れば  
幸甚です

版の出来については新聞社で  
も非常に心配し居りま●(し)た  
其のうち御製作についての  
万端の卑見を申上げて見た  
いと存じます  
先は取り敢へず

なほ序に申し上げますが、  
駕籠の前に立つてゐた時  
の盲法師弁信<sup>(4)</sup>—あれは  
今までの御作中の最大傑作  
の一つと拝見いたしました。  
この弁信はこれからよほど  
拙作中の重要な仕事を  
することになつて居ります

今日も雪です 今晚あたり  
山へ帰らうと存じます

大正十四

二月二十二日

遊於舎にて

中里生

石井画伯

御中

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町瑞●館〔遊於舎〕  
／中里弥之助

〔日付け〕二月二十二日

〔消印〕□□／□□・□□・22／□□

〔註〕

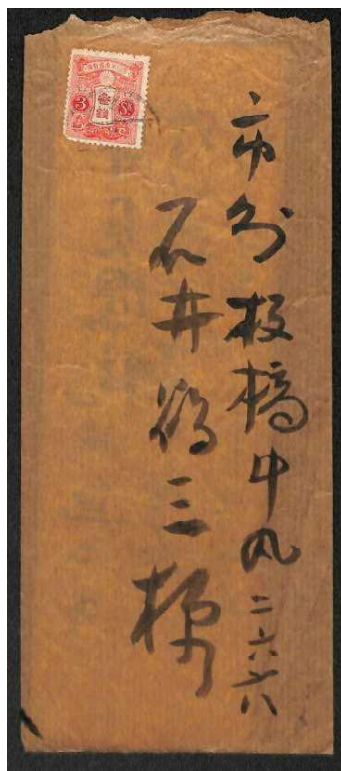
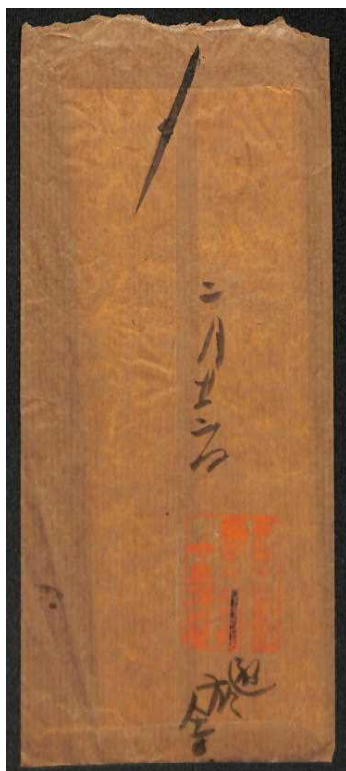
(1) 「守貞謾稿」。喜田川守貞（文化七年〓没年不詳）著。近世後期の風俗誌。刊行されず、稿本のまま残されていた。宇佐美英機によると、明治三十四年十月二十八日に浅草の書林浅倉屋久兵衛から帝国図書館が八十円で購入したと伝わるという（『近世風俗志（二）（守貞謾稿）』岩波文庫）。その後、『類聚近世風俗志』の書名で、明治四十一年十一月二十五日に「上」が、同年十二月二十五日に「下」が、國学院大学出版部より刊行されている。

(2) 「無明の巻（四十八）」（大正十四年三月一日夕）掲載。伊勢国の間の山の芸人で、槍の名人。伊勢神宮の参詣客が宇治橋の上から投げる銭を、下から網のついた竿で受け取る「網受け」をしていた。米友の外見については「間の山の巻」に「柄を見れば子供、面を見れば老人、肉を見れば

ば錚々たる<sup>そうぞう</sup>壮俊<sup>わかも</sup>」とある。

(3) 歌舞伎「伽羅先代萩」などの伊達騒動物に登場する、お家乗っ取りを企む悪人。仙台藩の家老であった原田甲斐をモデルとする。「伽羅先代萩」の「床下」の場では、妖術によって鼠に化けた仁木弾正が、御殿の床下で警護をしていた荒獅子男之助を出し抜き、連判状をくわえて悠然と花道を引込む。

(4) 盲目の法師。十二歳から安房国の清澄山で修行をしていたが、次第に目が見えなくなり、十七歳の時に失明した。人が聞いていようがいまいがおかまいなしに、長広舌をふるう。中里介山が「今までの御作中の最大傑作の一つ」と称賛した挿絵は「無明の巻（十）」（大正十四年一月十六日夕）掲載。



片貞隠秘は血二の  
 珍籍で少くも座石と  
 新いせん——字改  
 いせいにいせうか常不  
 同字体う座平を丸まうと  
 張常者うくめい上登  
 きこつ肉をうあむすか  
 したれ座のものかま  
 珍東うく書物となつて  
 ありまし、  
 さてお出の人物は  
 宇治山田の半友  
 三輪命を可なりすと、  
 身の太は四尺 台数は十九  
 髪は蓬髪、面は童顔なう  
 かたくて顔に皺あり肉體  
 は竹葉月鉄片にやうりて、  
 如くして肥大ふらぶ一尺  
 松街に妙にして道義解と  
 激昂し、人粉え分に  
 グロテスクを添に致したまひ

書簡5 (高1—267)

前略

五十六七回頃に出ます

露頭絵師は田崎●草雲の<sup>(1)</sup>

壮年時代の事蹟をかりたものでございます

三月四日

中里生

葉書 ペン

〔受信者〕市外板橋中丸／二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《記載なし》

〔日付け〕《記載なし》

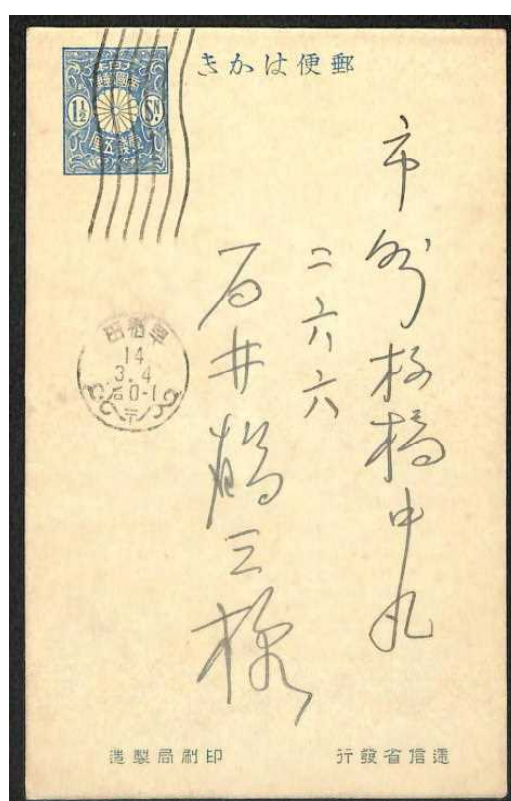
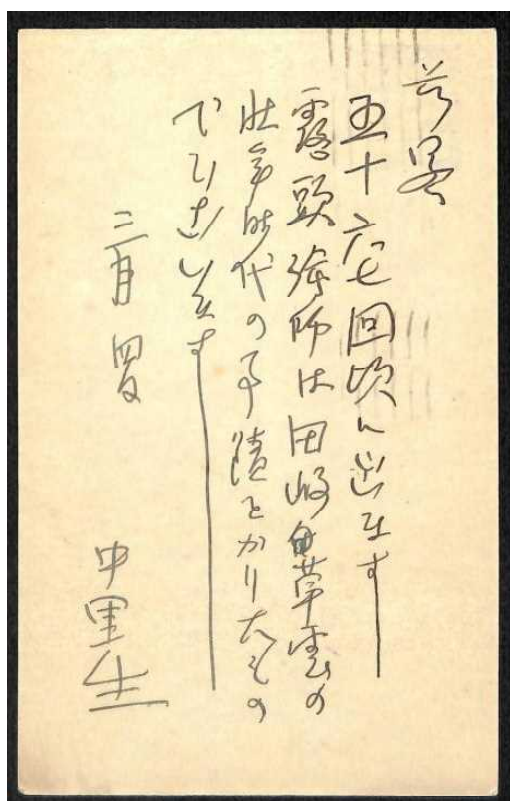
〔消印〕早稲田／14・3・4／后0—1

〔註〕

(1)「無明の巻(五十六)」(大正十四年三月十一日夕)、「無明の巻(五十七)」

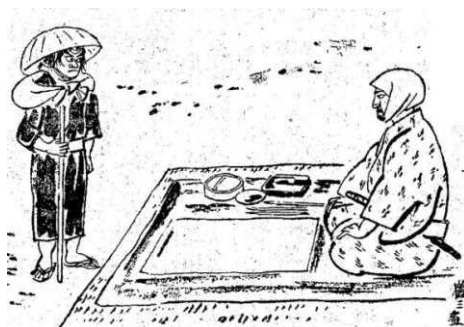
(大正十四年三月十二日夕)掲載。足利の絵師田山白雲。落ちぶれて、露店を張って絵を描いている。「無明の巻」で米友に出会い、米友を不動明王の眷属三十六童子のモデルにする。のちに油絵を見て感化され、西洋に関心を持つ。外国語を勉強し、駒井甚三郎とともにユートピアへ船出する。

(2)田崎草雲(文化十二年〜明治三十一年)、幕末・明治の日本画家。谷文晁・春木南溟らに師事した。沈周や徐熙などの中国画も研究し、独自の画風を確立した。明治二十三年、帝室技芸員になる。





「無明の巻 (56)」



「無明の巻 (57)」

書簡6 (高1—270)

葉書 毛筆

今夕の机龍之助大へん結構に  
拝見いたしました有難うござい

ます今日表慶館<sup>(2)</sup>へ行つて

見ましたが国宝の黄不動<sup>(3)</sup>の面を見て米友  
の事を考へましたが「面の」(参考と思ひ)

輪廓だけと思ひ

ましたがトテモ出来ませんでした。

四日夕

《葉書左上部に黄不動の墨書スケッチがあり、上から塗りつぶ  
されている》

〔受信者〕市外板橋町中丸ノ二六六ノ石井鶴三様

〔発信者〕中里生

〔日付け〕《記載なし》

〔消印〕《記載なし》

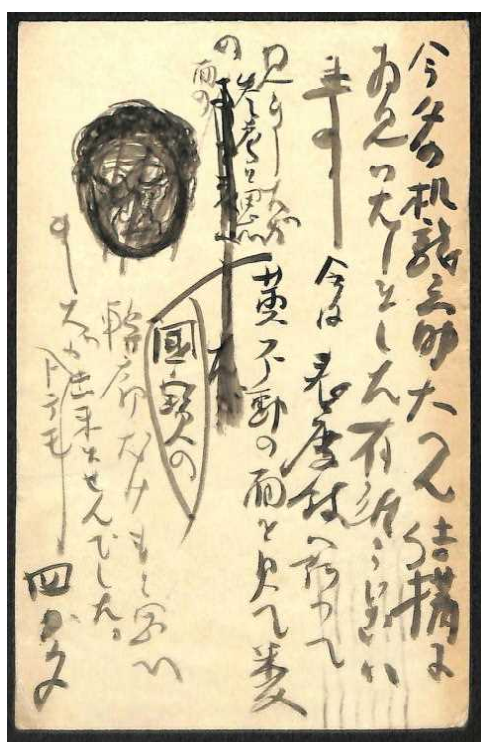
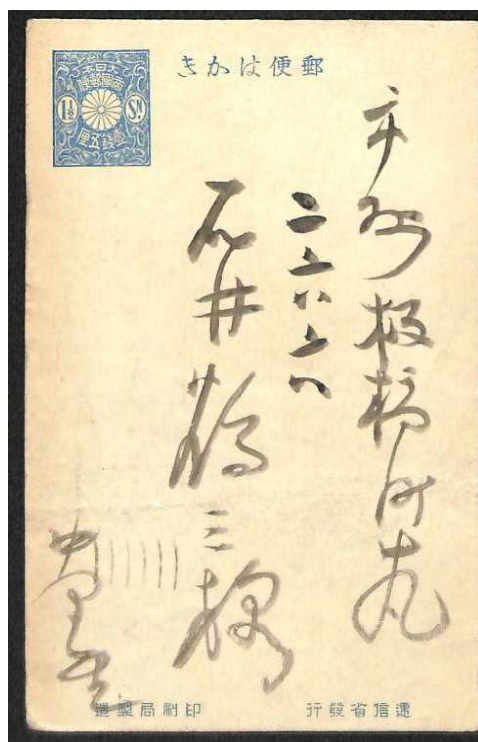
〔註〕

(1) ここで言及された龍之助は、「無明の巻(五十一)」(大正十四年三月五日夕)掲載か。

(2) 東京都台東区上野公園の東京国立博物館にあるルネサンス様式の建造物。明治三十三年、皇太子(大正天皇)成婚を祝う記念として東京市民が献納。同四十二年開館。鳳凰の形を模したドーム屋根、洋風石造の二

階建。

(3) 大津市の園城寺所蔵の黄色不動明王の国宝密画の通称。承和五年作。「青不動」「赤不動」とともに日本三大不動の一つ。





「無明の巻（51）」

## 書簡7 (高1—264)

葉書 毛筆

新出の人物

神尾主膳<sup>(1)</sup>

これ以前は然るべき旗本、

以前の福村<sup>(2)</sup>よりは身分が上、福村も神尾ももう少し若い<sup>(3)</sup>

つもりです。

間の山お君<sup>(3)</sup>

十九位、非常な善人

駒井●能登守<sup>(4)</sup>の愛妾で

あつたこともある、

近頃ある武術家から小生の作を主とし貴下のさし絵

にまで手とドイ「キビシイ」指摘をやつて来ましたいづれ

御覧に入れませう

〔受信者〕市外板橋中丸／二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町●●●／中里弥

之助

〔日付け〕《記載なし》

〔消印〕早稲田／14・3・12／前10—11

〔註〕

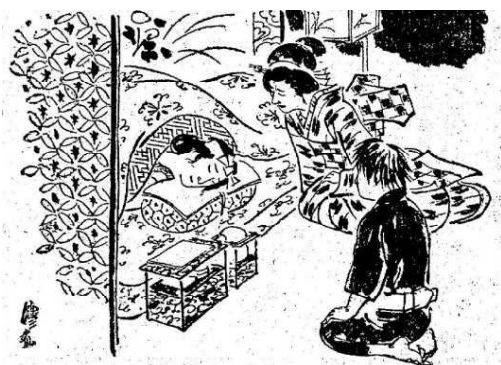
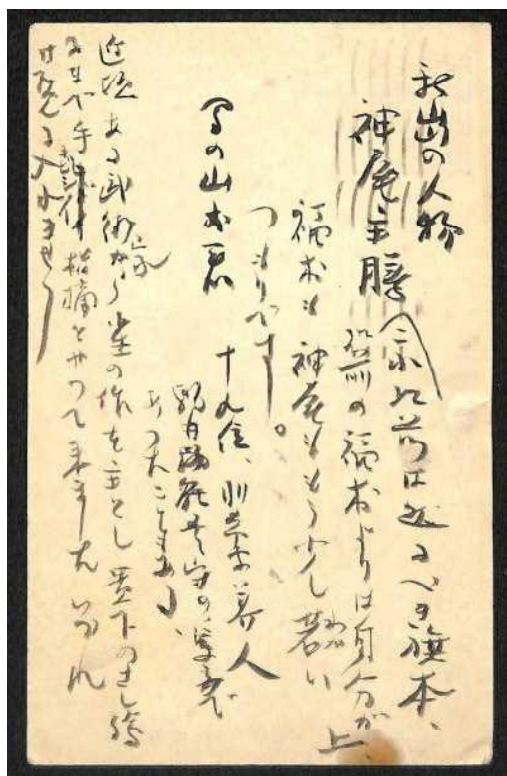
(1)「無明の巻(六十六)」(大正十四年三月二十二日夕)掲載。四谷伝馬町に住む三千石の由緒ある旗本だったが、父親の死後、放蕩が過ぎ、甲府の勤番組頭に左遷される。勤番支配として自分の上役になった駒井能登守をやっかみ、駒井を陥れようと策を弄すなど、数々の悪事を働く。神

尾主膳の年齢は「甲源一刀流の巻(八十)」に「三十越したばかりの若盛り」とある。

(2)「無明の巻(四十二)」(大正十四年二月二十二日夕)掲載。本文では「御家人崩れ」で、「歳はまだ若い、でっぴり太って、素肌、羽二重の袴、一つ印籠というこしらえ」と説明されている。

(3)お玉という芸名で、間の山で活躍していた女芸人。一匹のむく犬を連れていた。駒井能登守に見初められて側室となったが、能登守が失脚し、尼寺に身を隠す。お君が駒井の子を出産後、お松や米友に看取られて死ぬ場面が「無明の巻(六十四)」(大正十四年三月二十日夕)に掲載。

(4)本名は甚三郎。西洋通で、非凡な才能の持ち主。三十に足らぬ年で甲府の勤番支配に任命される。病気の妻を江戸に残し、甲府に赴任。芸人だったお君を側室にしたことで、神尾主膳によって失脚させられるが、江戸に戻って砲術の研究や造船に取り組む。



「無明の巻 (64)」



「無明の巻 (66)」



「無明の巻 (42)」

書簡8 (高1—265)

葉書 毛筆

拝啓 駒井●甚三郎<sup>(1)</sup>三十三才、美男子  
もと三千石芙蓉間詰、今ハイカラ姿、  
頭髮は別冊の写真ハリガミのあるのを  
御参考に致し下され度、洋服然るべく、  
支那人少年<sup>(2)</sup>、十二才位

《図》 頭弁髪でなくケシ坊主

支那服よろしく、  
神尾主膳はもう少し憎体にした方が、  
駒井との釣合上よろしいかと考へます

先は、

〔受信者〕市外板橋町／中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町●●●

《墨書》  
〔遊於舎〕

／中里弥之助

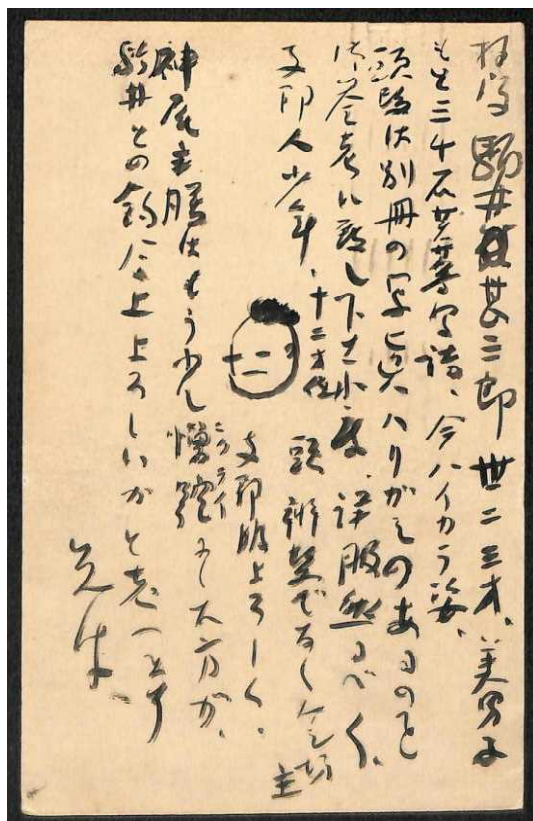
〔日付け〕三月二十六日

〔消印〕早稲田／14・3・26／后0—1

〔註〕

(1) 「無明の巻(七十六)」(大正十四年四月四日夕) 掲載。

(2) 「無明の巻(七十八)」(大正十四年四月七日夕) 掲載。





「無明の巻 (76)」



「無明の巻 (78)」

書簡9 (高1—266)

葉書 毛筆

追白 駒井甚三郎の服装は  
洋服でなくラシヤの  
筒袖羽織に袴などいか  
どかと存候

二十八日 中里

〔受信者〕市外板橋町／中丸二六六／石井鶴三様

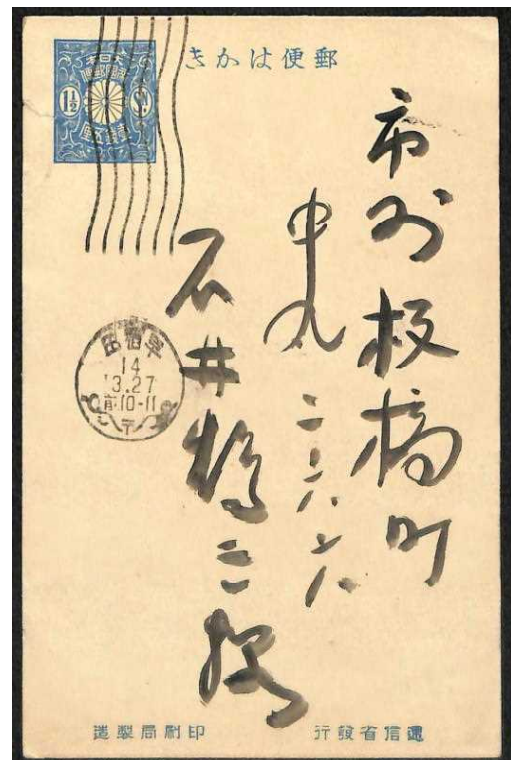
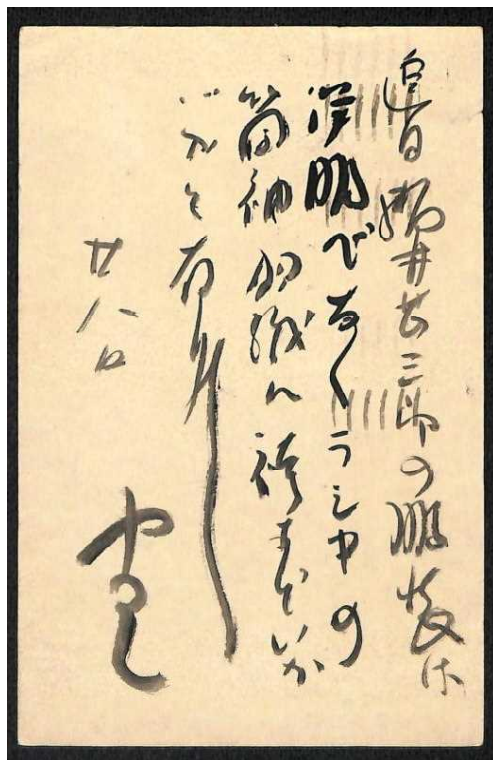
〔発信者〕《記載なし》

〔日付け〕《記載なし》

〔消印〕早稲田／14・3・27／前10—11

〔註〕

(1) 「無明の巻(七十八)」(大正十四年四月七日夕) 掲載(新聞掲載挿絵は書簡8で掲出)。



## 書簡10 (高1—21)

便箋 ペン

拝啓。

この頃の御絵について小生の感じた処と世評の一部とを申上げて見たいと思ひます。

特色は軽淡、気品、略筆、気分等の

処にあつて、どうも、陰惨、強烈、濃艶等の

分子が乏しき憾があるやうです。

たとへば、先日の机龍之助は、あれでは人一人斬

るだけの気力と残忍が無く、また女性を不知不

識に魅する魔力がひそん●であるとも思はれ

ません。

宇都木兵馬も、国貞<sup>(1)</sup>あたりの最も墮落した

草双紙のさしゑより一層表情が乏しく、(無論気品は比較にな

りませんが人間

性の悩みといふやうなものが、少しも見えてゐ

ないやうです。

慢心和尚<sup>(2)</sup>は人を蹴落す禅僧の機鋒●●峻烈

が全く欠けてゐるやうに思ひます。

その代り絵としての全体はよく整理されて

●いよ／＼熟して来るやうです。併し斯様な

熟し方は兄に取つては幸か不幸かわからないと

思ひます。

私の考では、どうも大兄が浮世絵や草双紙

を取り入れ過ぎるのではないでせうか。国貞<sup>(3)</sup>国

芳<sup>(3)</sup>あたりの末期が「の」その悪い癖がよく●消化は

されてゐながら多く入り過ぎて、却つて●●人物の精神を殺すことが多いやうです。「気が死んでゐるやうです。」

寧ろ、マクスクリンゲル<sup>(4)</sup>やビアズレー<sup>(5)</sup>等を参

考として大兄の筆に欠かけたるものを加へ、清麗

軽淡な処から陰深強烈な処にもう一步を進

められたら如何でせうか。人間の心を出すこと

は(無器用に主力をそゝかれたら如何でせうか。

近頃のは、たしかに器用になり過ぎてゐます。

他の人なら兎に角、大兄にあつては器用は

却つて害をなすのではないでせうか。

なほ大兄の特色についても大に申上げたい

のですが、(自分の事は棚へ上げて)こゝは苦言だけに止めて

置きま

す。幸に御海容を乞ふ。

昨日、関西地方から帰り今晚山へ参り<sup>(三三)</sup>日して

帰ります

四月二十一日夕

石井画伯御中

中里生

「受信者」市外板橋町中丸／二六六／石井鶴三様

「発信者」早稲田／遊於舎にて／中里生

「日付け」四月二十一日夕

「消印」□□田／10・□□・21／□□—□

〔註〕

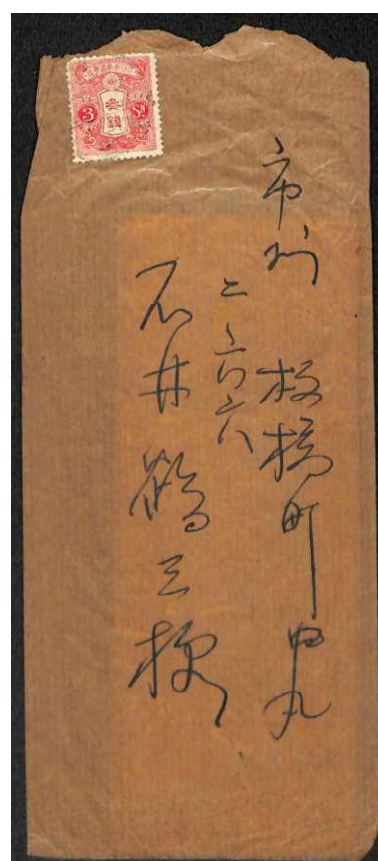
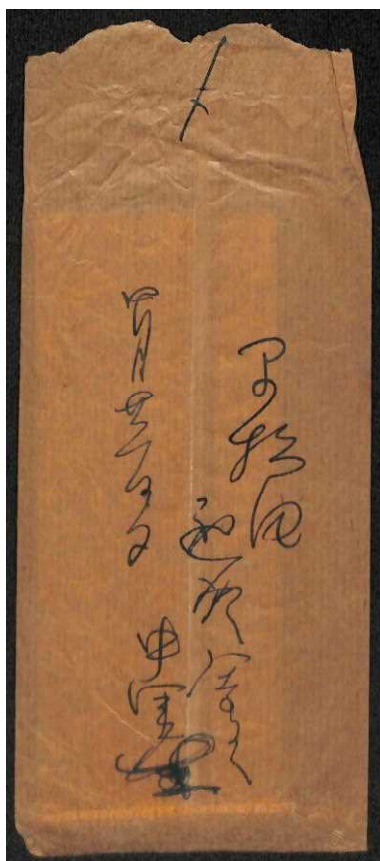
(1) 歌川国貞(天明六年く元治元年)、江戸後期の浮世絵師。初世豊国の門弟。号は一雄斎、五渡亭、香蝶楼など。俳優似顔の錦絵と草双紙のさし絵を得意とした。三世豊国を襲名。

(2) 「慢心和尚の巻」から登場する、恵林寺の師家。敵討ちが大嫌いで、宇津木兵馬に大きな影響を与える。

(3) 歌川国芳(寛政九年く文久元年)、江戸後期の浮世絵師。号は一勇斎、朝桜楼。初世豊国の門弟。師豊国と同門の国直、勝川春英と合わせて三家の画風を折衷し、さらに、洋画的手法を合わせて、一家を成した。『水滸伝』の豪傑を描いた錦絵はその代表作。

(4) マックス・クリンガー(一八五七年く一九二〇年)、ドイツの彫刻家、版画家。印象主義の手法を取り入れて独自の象徴的様式を創造した。

(5) オーブリー・ヴァインセント・ビアズリー(一八七二年く一八九八年)、イギリスの挿絵画家、詩人、小説家。アール・ヌーボーの先駆者。ラファエル前派や浮世絵に学び、大胆な白黒の対比と流れるような曲線に世紀末的雰囲気漂わせた挿絵・ポスターを多く描く。



折光。  
 二項の字増まつて、少々の感いたふと世評の  
 一部とも申上つて只大いと思ひます。  
 特色は輕快、氣品、墨筆、氣分等の  
 處はあつて、とりも、陰沈、強烈、優艶等  
 の分よが乏しく、慍かまや、なす。  
 大い一ば、矢日の机籠にゆば、あつては人一人斬  
 りなげの氣力と殊ふか直く、また、女校を知らず  
 或は戀する、愛かかいと人思ひぬ、とと思はれ  
 ません。

(五) 江戸の風物  
 江戸市井の風物。國貞おたりの品も墜落して、草紙破のさし又より一層表情がこしく人間性的な情をとりやうよいか少しもたへてゐるやうな感じがする。

情への愛は人々流れて禪僧の教録にあらわされていく。あまぐちでいふやうな感じがある。

さう代り、増しとて今迄はよくお理々としていふ。ぬしとてまじやうです。位し始なふぬし方は足を取つては幸か不幸か少くあるといふことがよくある。

4  
 の考へは、いゝと大足かは世強や草紙  
 を取り入し過ぎつては有りませうか。國々國  
 々あるりの末却かその要い二病かよく治す代は  
 され〜  
 氣が来てゐるやうに思ふて、即ち人  
 の精神を救ふに力はいやうです。  
 止まら、マクスクリンゲンやヒアスレー等を知  
 ると一々大足の筆へ欠けたものを加へ清書  
 後は又から臨海強烈な爲め一歩を  
 めるゝやうなやうか。人間を救ふこと

1. 華岩庵の主人と云ふか、小スウ、ゆゑにやう  
 か。  
 近頃では、ふしかん、岩屋は、予、思ひ、いゝゝゝ。  
 他、人、あつ、ふ、岩屋、大、思ふ、あつ、ふ、岩屋は  
 ち、又、思ふ、あつ、ふ、岩屋は、いゝゝゝ。  
 今、大、思ふ、あつ、ふ、岩屋は、いゝゝゝ。  
 の、思ふ、あつ、ふ、岩屋は、いゝゝゝ。  
 予、思ふ、あつ、ふ、岩屋は、いゝゝゝ。  
 昨日、岩屋は、いゝゝゝ。  
 四月十一日

## 書簡11（高1―22）

巻紙 毛筆

五月五日のお手紙  
大なる感激を以て今日  
拝見致しました。

その日は私は大菩薩峠  
の頂上へ参つて居りました。  
さうして御案定のやうな  
道筋をたどつて昨日帰京  
致しました次第です。

さて先般は御絵に就ての  
妄評を御海容下され  
て恐縮の至でございます。

まだ小生の申上げた事に誤  
もありおわびも申上げなければ  
なりません、それは後日の事  
と致しまして、最近大菩薩峠  
行の御勧誘は欣んでお受け  
を致した小（い）と存じます。

それはあの峠は予想以上に  
壮大にして優美なる峠で  
ありまして、私は驚喜致し  
ました次第ですから今後も  
機会ある毎に出かけたいと  
思つてゐます幸今度  
の経験で案内役もつとま

る考であり、また後日を予  
想して馬の借入の手筈も定  
めて来ましたから御同行の  
諸君を峠だけでも乗馬せし  
めゐて上げる事も出来ます  
小生も近来はあまり足に自  
信がありませんから―それ  
と新らしい経験として今度  
は峠の上で諸君と別れて  
単独で塩山<sup>（1）</sup>へ帰るか或は  
連嶺つゞきを初鹿野<sup>（2）</sup>方面  
へ出て見やうかとも思つてゐ  
る次第です トニカク  
非常な差つかえが無い（起らない）限り  
は御一行に加へていたゞき  
たうございます  
先は取り敢へず此の件  
だけの御返事を申上げて  
置きます  
五月八日。

石井大兄

中里生

侍史

〔受信者〕市外板橋中丸／二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町●●●／中里生

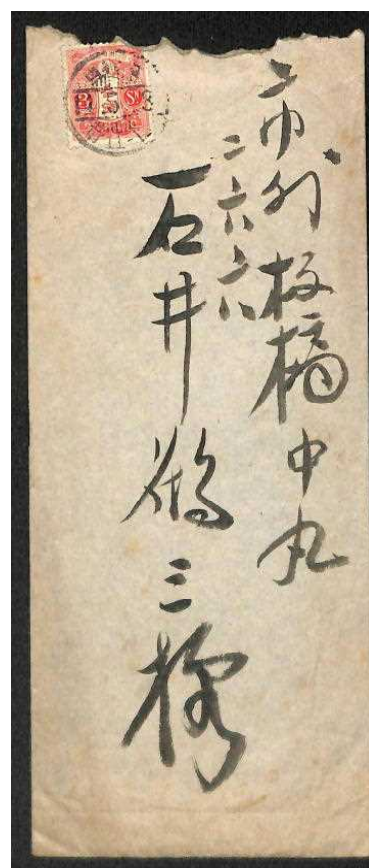
〔日付け〕五月八日

〔消印〕□□□／14・5・3／前11―12

〔註〕

〔1〕山梨県北東部、甲府盆地の北東隅にある地名。古くから豪族が居住し、濠をめぐらせた屋敷が残る。青梅街道の旧宿場町で、ブドウ、モモの産地。雲峰寺、向岳寺、恵林寺には貴重な文化財が多い。中央本線が通じ、大菩薩峠などへの登山口。

〔2〕読みは、はじかの。山梨県北東部、甲州市南部の旧村域。甲府盆地東方にある。





## 書簡12 (高1—24)

封筒欠 巻紙 毛筆

拝啓 其後は御無沙汰仕り候。

さて「白骨の巻」金森君の挿絵も其の後

苦心致され効果大に見るべきものありと存じ

候。この巻は短きつもり処、やはり百回

内外までは続かせ度(百八煩惱といふと存じ

候間(百八煩惱といふ意味にはあらざるも百八

回で一巻を断つの習はし有之、それ以上にはならず

と思ひますが)次回の題目は未だ定めず候へ共、

その辺の御心持にて宜しく御願ひ申上げ度存

じ奉り候 この事は日々社の方へも打ち

合せスミに相成り居り候。

いづれ拝眉の節万々申上ぐべく候へ共

右あらかじめ貴意を得<sup>(置力)</sup>候 拝具

七月十三日

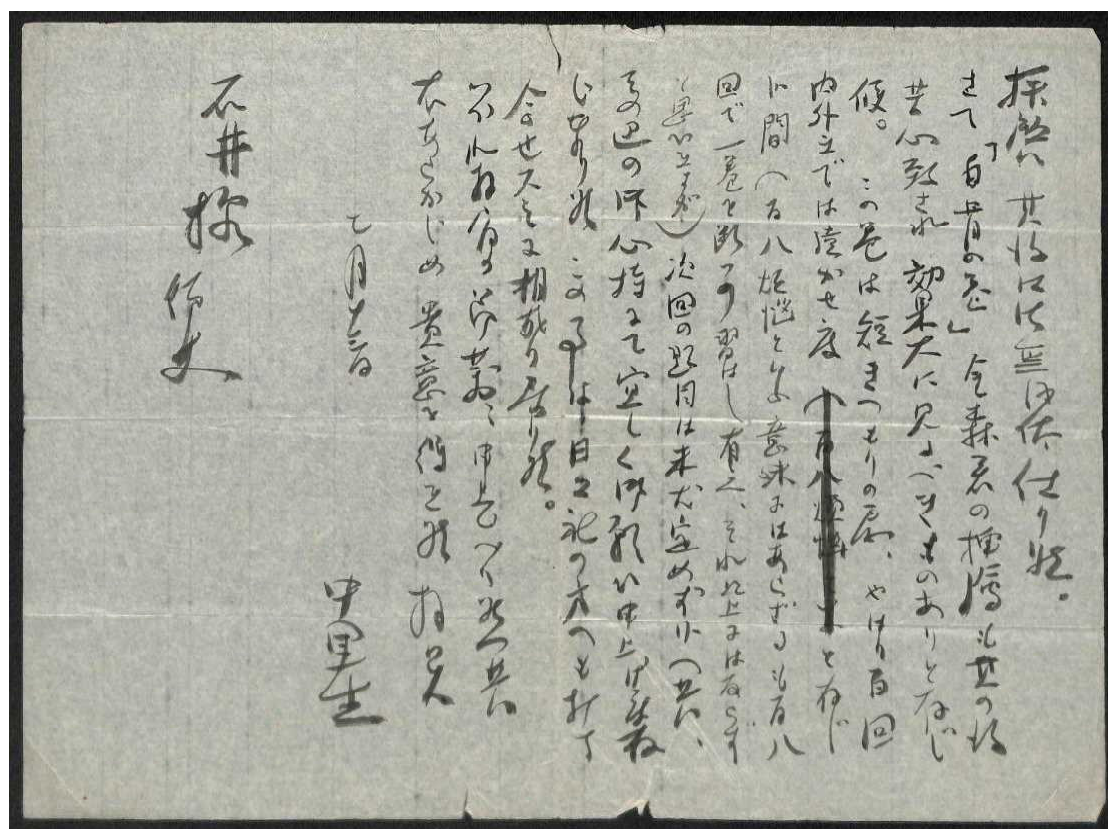
中里生

石井様

侍史

〔註〕

(1) 金森観陽(明治十七年〜昭和七年)、日本画家・挿絵画家。尾竹越堂に師事。のち、大阪に住し、関西画壇で活躍。新聞小説の挿絵画家としても知られ、白井喬二「新撰組」(大正十三年〜十四年)などの挿絵を描いた他、『大菩薩峠』では「白骨の巻」の挿絵を担当した。



書簡13 (書4—552)

《本文なし》

絵葉書 ペン

《絵葉書の写真下部に印刷》

(日本アルプス) 白骨温泉全景 Shirahone Hotspring

〔受信者〕 東京市外／板橋中丸／二六六／石井鶴三様

〔発信者〕 白骨温泉にて／中里生 《氏名左傍にて「明日乗鞍登山」とあり》

〔日付け〕 大正十四年／八月三日

〔消印〕 長野・□□／14・8・4／后3—6



## 書簡14 (高1—18)

便箋 毛筆

拝啓 「白骨の巻」を第九十二回<sup>(1)</sup>で終り  
改めて「他生の巻」<sup>(2)</sup>と題して執筆するつもりで  
ございますから宜しく御願ひ申上げ  
ます、まだ原稿は出来ませんが出来次  
第趣向か草案かを御送り申上げます。  
中島さん<sup>(3)</sup>へも宜しくお伝へ下さいませ。  
先は取いそぎ要件のみ 早々不備  
一四、八、一四

中里生

石井様 御許へ、

「受信者」市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

《墨書》

「発信者」《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町三百／中里弥之

助

「日付け」大正十四年／八月十四日

「消印」□□／□・8・□／后7—□

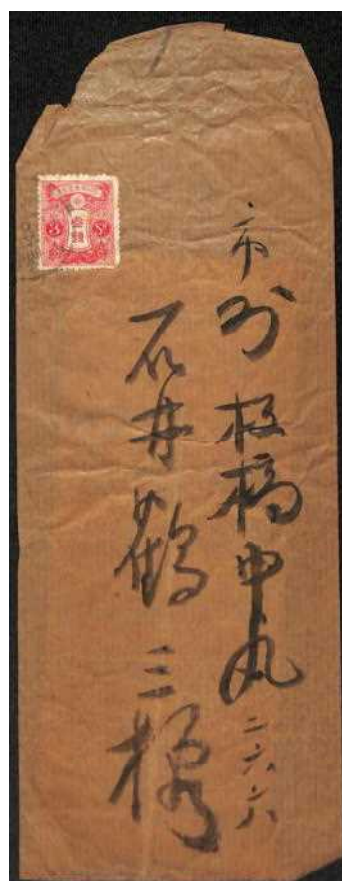
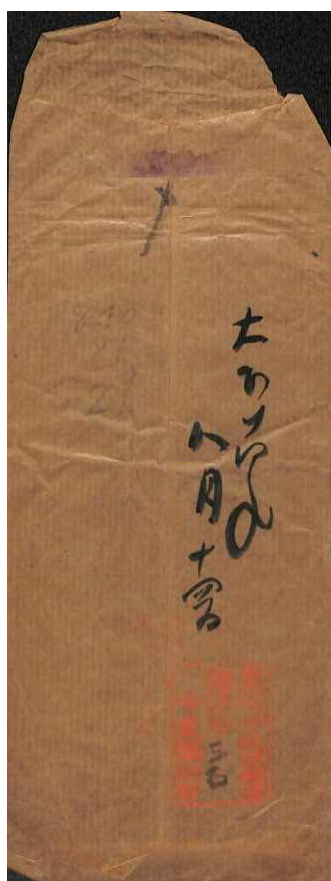
〔註〕

(1)『大菩薩峠』『白骨の巻』は、『東京日日新聞』夕刊にて大正十四年五月十三日より連載がはじまり、同年八月二十七日に第九十二回をもって終了した。挿絵は金森観陽。第九十二回の文末には著者による附記があり、「明日よりは『他生の巻』と題して筆を進め」ること、「他生の巻」の挿絵は石井鶴三氏が再び筆をとることが予告されている。「白骨の巻」(九

十二) (大正十四年八月二十七日夕) 掲載。

(2)『大菩薩峠』『他生の巻』は、『東京日日新聞』夕刊にて大正十四年八月二十八日に連載がはじまり、同年十二月二十九日に第四百四回をもって終了した。

(3)写真家、中島謙吉。後に出版社の光大社を設立し、『石井鶴三挿絵集』第一巻(昭和九年七月)に、鶴三の描いた『大菩薩峠』の挿絵を収めたことが介山の怒りを呼び、挿絵の著作権をめぐる訴訟と論争を引き起す、いわゆる「挿絵事件」へとつながった。





## 書簡15 (書6—38)

葉書 ペン

他生の巻、

第一回<sup>(1)</sup>は——清澄の茂太郎<sup>(2)</sup>が月見寺<sup>(3)</sup>の

三重の塔の九輪の上で恍惚として星夜

の美観をながめてゐる処、

第二回<sup>(4)</sup>——は同じ夜同じ寺の秋草の庭で弁信<sup>(5)</sup>が杖を手にして草間の

虫の音に聞き惚れてゐる処、

右宜しく原稿はあと社<sup>マ</sup>の方から廻すつもり

「受信者」市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様

「発信者」《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町三百／中里弥之

助

「日付け」《記載なし》

「消印」早稲田／14・8・18／后1—2

〔註〕

(1)「他生の巻(一)」(大正十四年八月二十八日夕)掲載。本書簡は、書簡

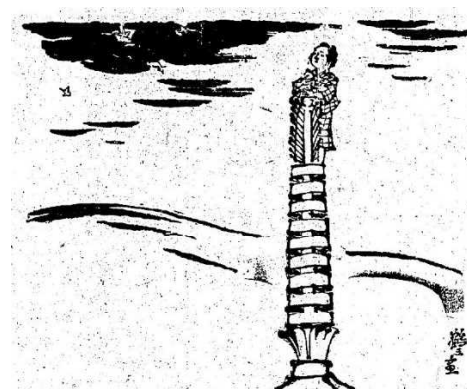
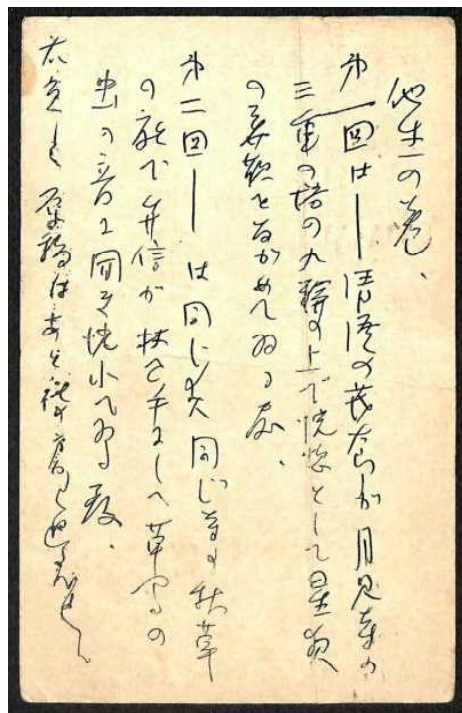
14 (同年八月十四日付)で言及されている「他生の巻」の「趣向か草案か」に相当するものであり、鶴三はこの指示に従う形で両回の挿絵を描いている。

(2)『大菩薩峠』『安房の国の巻』より登場した、本作後半の主要人物の一人。幼いころ安房国清澄の寺に預けられた美少年で、歌をよくする。自然に親しみ、「月の出づるに先だつて、高い所へ上りたがる癖がある」(「他生の巻(一)」)とされる。

(3) 甲州上野原にある寺。現・山梨県上野原市の保福寺がモデル。「甲州上野原の報福寺、これを月見寺と唱へるのは、月を見るの趣が変つてゐるからです」(「無明の巻(四十九)」)。「無明の巻」から「他生の巻」において、物語の重要な舞台となる。

(4)「他生の巻(二)」(大正十四年八月二十九日夕)掲載。

(5) 清澄山で修業していた盲目の僧侶で、茂太郎とおなじく本作後半の主要人物の一人。茂太郎を山から逃したことから親しくなる。



「他生の巻 (1)」



「他生の巻 (2)」

## 書簡16 (高1―262)

葉書 ペン

拝啓 この程小生も信州旅行、別所<sup>(1)</sup>は  
二十日と二十一日と居りましたのに存ぜぬ事  
とて残念千万です。

御多忙中何とも恐縮に存じますが  
何分お願い致します。昨晚帰京い  
たしました、間に合はなければ最初のうち  
絵ぬきで

二十三日、

《日付の下に、土地の位置関係だけを示したごく簡単な図あり。  
以下は図中の地名。》

山田温泉<sup>(2)</sup>／別所<sup>(3)</sup>／千ヶ滝<sup>(4)</sup>／地藏川

〔受信者〕長野県／別所温泉柏屋方／石川鶴三様<sup>ママ</sup>

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町／中里弥之助

〔日付け〕《記載なし》

〔消印〕早稲田／14・8・23／前10―11

〔註〕

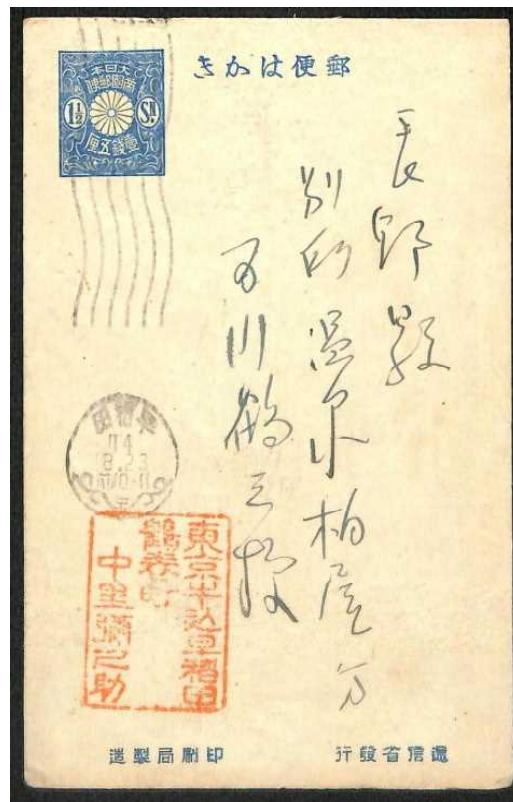
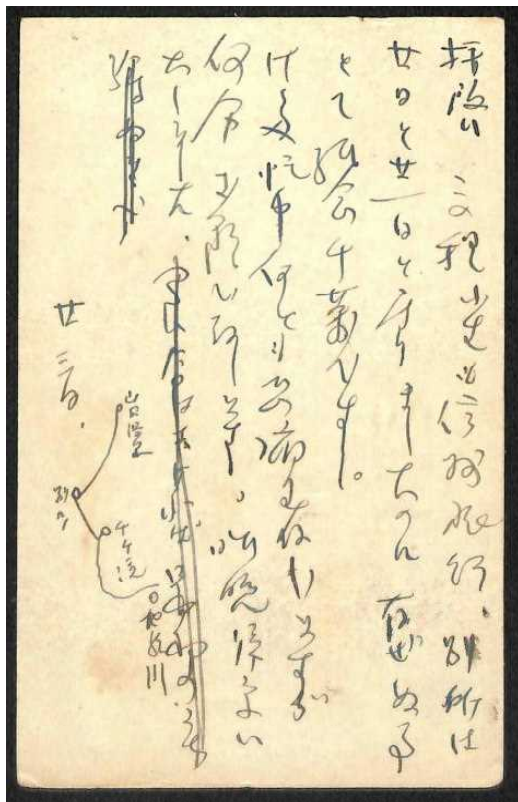
(1) 現・長野県上田市にある温泉。「上田市の南に二三の温泉場があるが其  
内で別所が最も聞えてゐる」(森川憲之助『新編日本温泉案内』誠文堂、  
大正十四年六月、百七十頁)とされる。宛先の柏屋については、同書に  
「内湯を有するのは(中略)斎藤館柏屋別荘、柏屋」とあり、「設備は柏

屋別荘を以て第一とし、都会人を満足せしむるに足る」と紹介されてい  
る(百七十二―百七十三頁)。

(2) 現・長野県上高井郡高山村にある温泉。『新編日本温泉案内』(前掲)  
によると、「信越本線豊野駅(長野駅より二つ目)下車、それより東北四  
里(中略)又信越本線屋代駅より分岐する河東鉄道須坂駅より三里」。

(3) 現・長野県北佐久郡軽井沢町にある滝。ただしここでは、堤康次郎に  
よって大正七年より本格的な開発がはじまり、本書翰の当時は箱根土地  
株式会社が経営していた避暑地、千ヶ滝遊園地のことか。奥川夢郎『軽  
井沢を中心として』(北信毎日新聞株式会社、大正十二年八月)によれば、  
「長野県信越線沓掛駅(軽井沢の次駅)の北方約十五丁の所に在る」と  
され、「避暑地、遊園地として又別荘地として最上の利便を具へて居る(中  
略)園内最高の山腹にグリーンホテルがある(中略)その外に観翠楼と  
云ふ旅館がある」とのことである。

(4) 現・群馬県吾妻郡長野原町にあった草軽軽便鉄道の駅、地藏川駅のこ  
とか。ただし、前項の「千ヶ滝」とともに、実際の地理関係が介山の描  
いた略図とかなり相違しており、断定はできない。



## 書簡17 (高1—263)

葉書 ペン

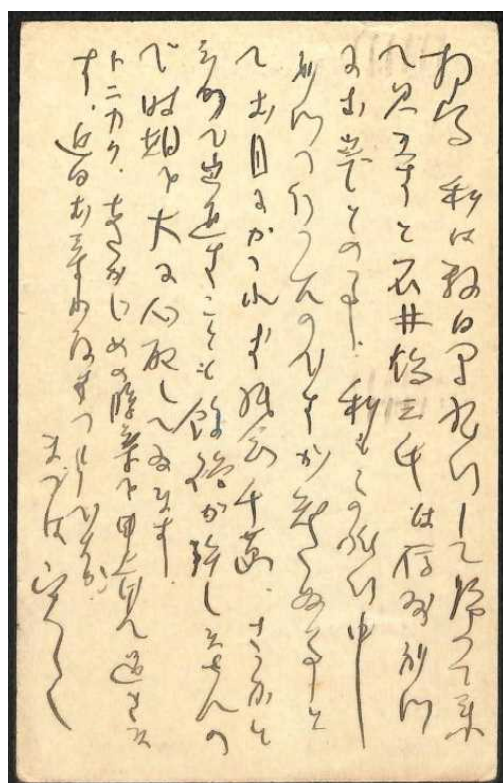
拝啓 私は数日間旅行して帰つて来て見ますと石井鶴三氏は信州別所にお出でとの事、私もこの旅行中別所へ行つたのですが知らぬ事とてお目にかゝれず残念千万、さうかと云つて出直すことも余裕が許しませんので時期を大に心配してゐます、トニカク、あらかじめの腹案を申上げて置きます、近日お尋ね致すつもりですが、まづは宜しく

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様／御留守宅御中

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町三百／中里弥之助

〔日付け〕二十三日

〔消印〕早稲田／14・8・23／后7—8



## 書簡18 (書6—37)

葉書 ペン

大菩薩峠

「多生の巻」案

第三回——二回と同じ場面、獵師の勘八、<sup>(2)</sup>獵から帰

った姿で弁信と立話

第四回——お銀様月見寺の陰惨たる一室に

二尺許の白鞘の刀を膝に●燈下で半分ばかり抜いて

見てゐる、  
床の間に草花、  
お銀様頭巾に羽織端然として例の如し

第五回——右お銀様の処へ(刀はすでに床の間へ

立てかけてある、) 清澄の茂太郎が夜具蒲団を頭高に<sup>(7)</sup>

かつぎ込んで来る——清茂太郎は無地(巾)緋絹の広袖単物一

枚着用

《右下に鉛筆で108+92=200との筆算あり。》

〔受信者〕市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町／中里弥之助

〔日付け〕二十三日

〔消印〕早稲田／14・8・23／后7—8

〔註〕

(1)「他生の巻(三)」(大正十四年八月三十日夕)掲載。

(2)「無明の巻(百八)」(最終回)に、宇津木兵馬が「寺に逗留してゐるうちに遊びに来た獵人の案内で、三日分ほどの食糧を携帯したまゝで、山

を分けて何処ともなく入り込んでしまひました」とある。「白骨の巻」では兵馬とともに、山中で拐帶されたお銀を救い、「他生の巻」冒頭で茂太郎と弁信のいる月見寺へと案内してきた。「獵師の勘八は、今、山から戻つたばかりのなりで、鉄砲をかつぎながら言葉をかけた」(他生の巻(三))とある。

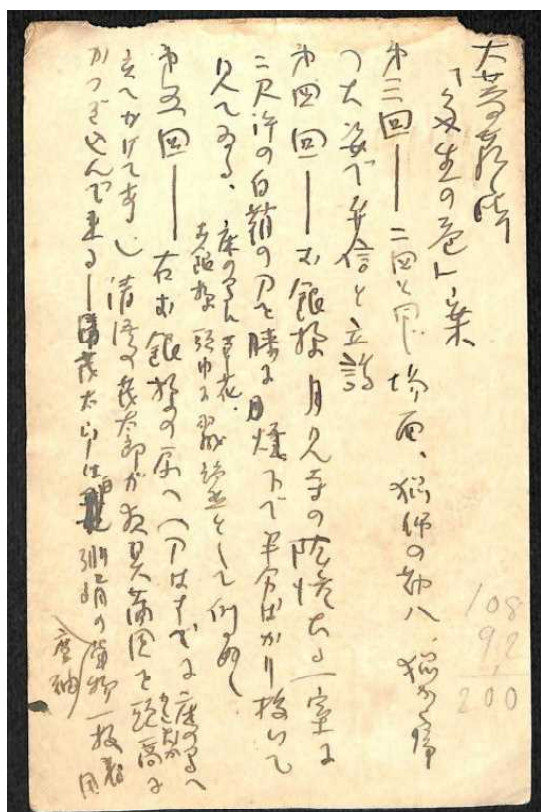
(3)「他生の巻(四)」(大正十四年九月一日夕)掲載。

(4)甲州有野村の藤原家当主、伊太夫の先妻の子。火傷を負つて傷のある顔を、つねに頭布で覆っている。机龍之助に強く執心しており、この「他生の巻」では月見寺にて彼が滞在した痕跡を見つけ、龍之助を追つて白骨温泉へと向う。

(5)机龍之助が、命を助けたお若から旅の餞別に与えられた堀河国弘の刀。ただし「無明の巻(八十九、九十)」にて、彼が佩刀と刀身を入替えたため、この時お銀が目になっているのは龍之助がもとと帶びていた刀である。

(6)「他生の巻(五)」(大正十四年九月二日夕)掲載。

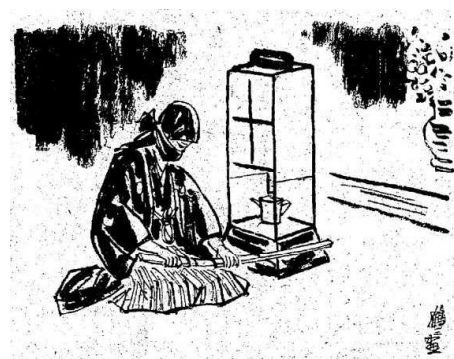
(7)掲載された「他生の巻」五の挿絵は、蒲団を担いだ茂太郎を描くのみで、この床の間の刀の描写はない。



「他生の巻（5）」



「他生の巻（3）」



「他生の巻（4）」

## 書簡19 (書6—36)

葉書 ペン

他生の巻——梗概

第六回<sup>(1)</sup>、お銀様と茂太郎の間答、お銀様服装同断覆面——茂太郎広袖の緋絹、箱枕<sup>(2)</sup>を持つ

てある——場所同前

第七回<sup>(3)</sup>——お銀様覆面を脱し全面焼けたぐれ白眼、

呪ひそのものゝやうな面を現はし茂太郎を膝の上に

抱き締める茂太郎苦悶、——場所同前、

第八回<sup>(4)</sup>——半ぺん坊主<sup>(5)</sup>一杯きげんにて大きな奉加帳<sup>(6)</sup>をたづさへ月見寺へ乗り込む処——半ぺん坊主<sup>(5)</sup>ずんぐり太った

坊主、

第九回<sup>(6)</sup>——弁信、半ぺん坊主を説き破る〔伏す処〕〔説諭する、

場所寺院内〕半ぺん坊主

〔受信者〕市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町／中里弥之助

〔日付け〕二十五日、

〔消印〕□□田／14・8・25／后□—□

〔註〕

(1)「他生の巻(六)」(大正十四年九月三日夕)掲載。

(2)箱形に作られた木の枕。胴となる箱の上に、小さな括り枕を載せて用い、就寝中に髪が崩れないようにする。お銀の寝具を運んできた茂太郎が携えてきたもので、「他生の巻(五)」の末尾に「間もなく一つの箱枕

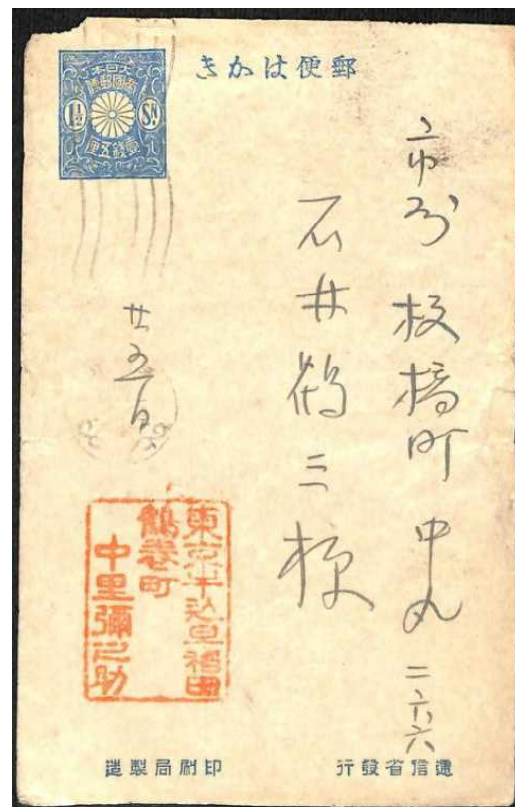
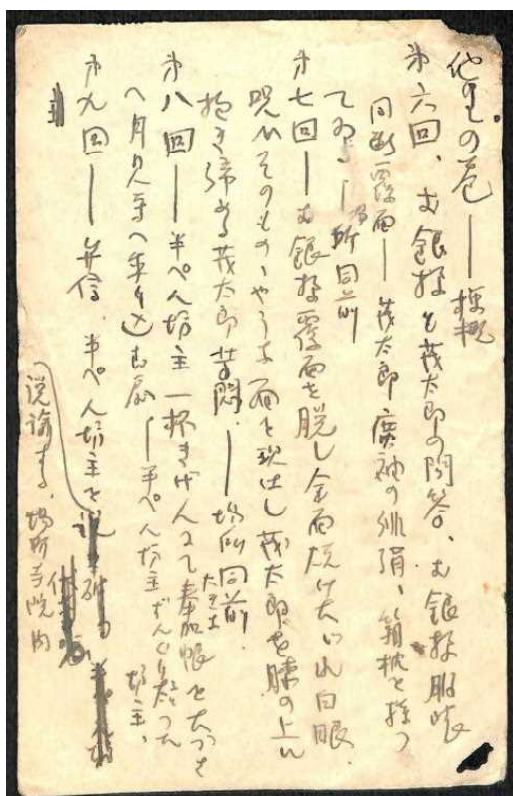
を持つてきた清澄の茂太郎は、燃ゆるばかりの緋絹の広袖の着物を着てゐました」とある。

(3)「他生の巻(七)」(大正十四年九月四日夕)掲載。

(4)「他生の巻(八)」(大正十四年九月五日夕)掲載。

(5)武州高尾山近辺に庵を結び、暮している僧侶。「京都あたりから来た風来坊主で、高尾の寺に籍があるわけでも何でもないが、この近所へ草庵やうのものを構へて、ぶら／＼と暮らしてゐる。半ぺんが大好きで、半ぺんを肴に酒を飲ませさへすれば上機嫌で、何でも喋り出す。そこで、半ぺん坊主で通つて誰も本名を知るものがありません」(「白骨の巻(八十)」)。「他生の巻(八・九)」では奉加帳を持ち、高尾山の工事のためという名目で金を集めようとするが、弁信に説破されて退散する。

(6)「他生の巻(九)」(大正十四年九月六日夕)掲載。



「他生の巻 (8)」



「他生の巻 (6)」



「他生の巻 (9)」



「他生の巻 (7)」

書簡20 (高1—260)

葉書 ペン

前略

お銀様は男装でありました。

間に合はなければ

お書きになつたならば

ドチラでも宜しいが、

〔受信者〕市外板橋中丸／二六六／石井鶴三様

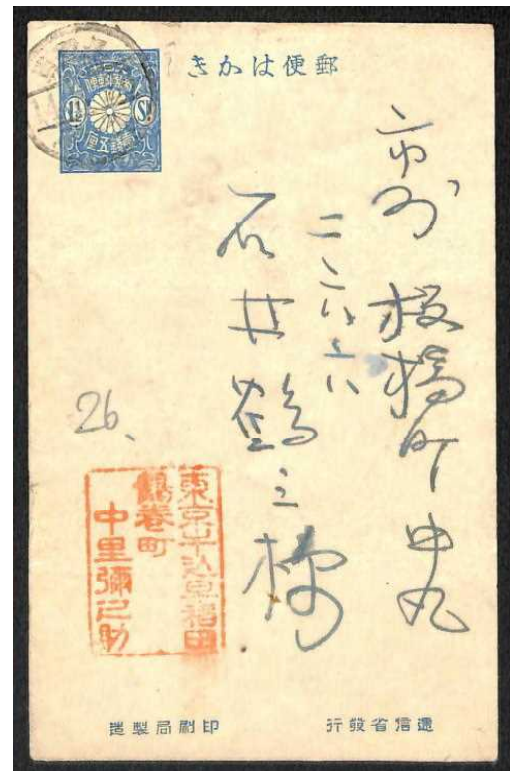
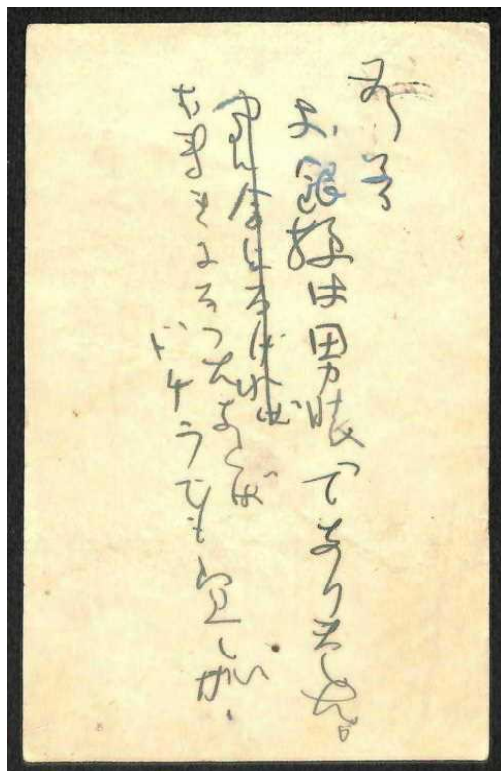
〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町／中里弥之助

〔日付け〕26、

〔消印〕早稲田／14・□・26／□7—8

〔註〕

(1) お銀様は、甲州有野村の富豪藤原家の一人娘。十歳の時に火傷で顔が焼けただけ、常にお高祖頭巾で顔を覆っている。「お銀様の巻」で、はからずも、盲目の龍之助と結ばれる。



## 書簡 21 (書 6—35)

葉書 ペン

大善、他生の巻——稿本梗概●

第十回<sup>(1)</sup>——宇津木兵馬<sup>(2)</sup>、行李を結びながらお銀様と

対話、燈下、室、同前の寺、お銀様白鞘の一刀を取つて

兵馬に見せやうとする、

第十一回<sup>(3)</sup>——同前の場面、兵場その白鞘を抜いて見て漸く驚く<sup>(4)</sup>の気持——傍にあら向きのお銀様第十二回<sup>(4)</sup>——お銀様旅装<sup>(男装 頭巾例の如く)</sup>にて馬上、兵馬同じく徒立<sup>カチカチ</sup>で馬の前に立ち月見寺門前を出立、

——信州に向はんとす、

右、——

「受信者」市外板橋町中丸／二六六／石井鶴三様、

「発信者」《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町／中里弥之助

「日付け」九月一日

「消印」早稲田／14・9・1／前9—10

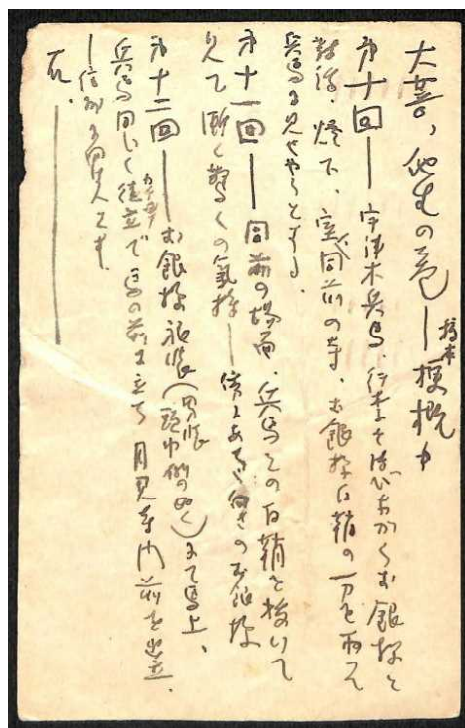
〔註〕

(1)「他生の巻(十)」(大正十四年九月八日夕)掲載。

(2)『大菩薩峠』の物語の発端となった御岳山の奉納試合において、机龍之助に頭蓋骨を割られた死んだ宇津木文之丞の弟。兄の仇を討つべく、出奔した龍之助を追って旅に出るが、すれ違いが続く。「他生の巻」では、月見寺にてお銀から龍之助の残していった刀を見せられ、彼女とともに龍之助のいる白骨温泉へと向う。

(3)「他生の巻(十一)」(大正十四年九月九日夕)掲載。

(4)「他生の巻(十二)」(大正十四年九月十日夕)掲載。





「他生の巻（12）」



「他生の巻（10）」



「他生の巻（11）」

## 書簡22 (書6—34)

葉書 ペン

大善 他生の巻 ヨビ梗概

第十三回<sup>(1)</sup>——和船の大なるもの木更津行乗合甲板上

船の帆柱と荷物の蔭に駒井甚三郎隠れて読書——その

一方では一座の遊び人トバク(采の丁半)をはじめ乗合客を困らせる。

第十四回<sup>(2)</sup>——駒井トバクを警告せんとす。田山白雲<sup>(3)</sup>●「不意に」

跳り出で、賭場を蹂躪する。

第十五回<sup>(4)</sup>——田山トバクの遊び人●二人の襟首を持ち、<sup>マ</sup>を左右

の手に引ずりて船底に投げ込む すべて●乗合船

甲板上の光景——海上、

「受信者」市外板橋町中丸ノ二六六ノ石井鶴三様

「発信者」《朱方印》東京牛込早稲田ノ鶴巻町ノ中里弥之助

「日付け」九月●二日、

「消印」早稲田ノ14・9・2ノ后0—1

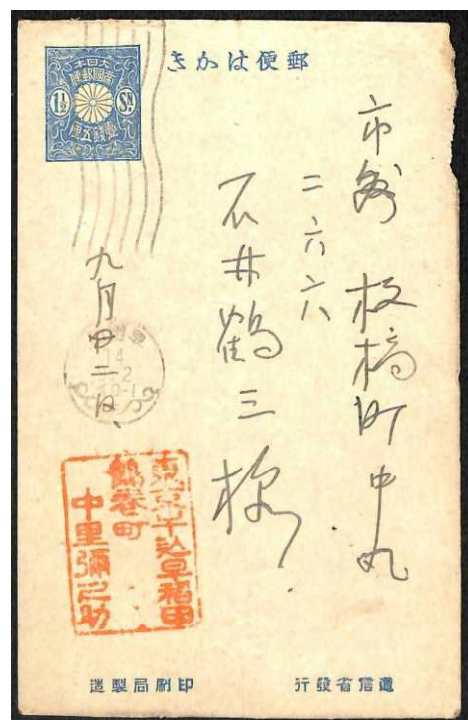
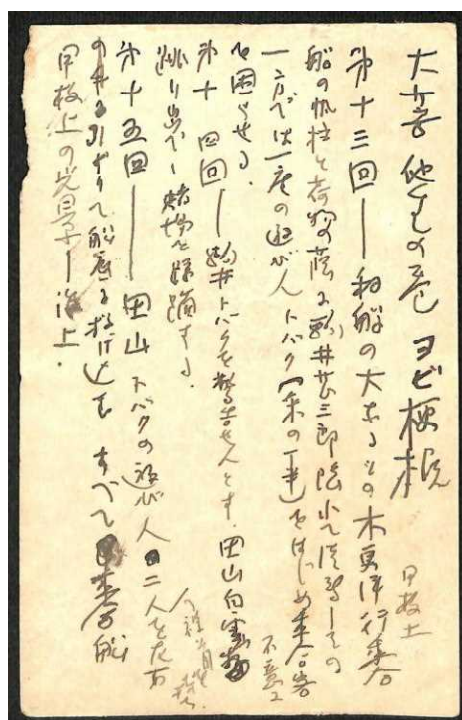
〔註〕

(1)「他生の巻(十三)」(大正十四年九月十一日夕)掲載。

(2)「他生の巻(十四)」(大正十四年九月十二日夕)掲載。

(3)書簡5の註(1)参照。

(4)「他生の巻(十五)」(大正十四年九月十三日夕)掲載。





「他生の巻（15）」



「他生の巻（13）」



「他生の巻（14）」

## 書簡23 (書6—33)

葉書ペン

拝啓

先般予報申上候もの左の如く訂正。

第十三回は駒井と木更津船。

第十四回——遊民共の賭博を駒井

責める。

第十五回——は田山白雲博徒を懲らす。

委細は今日発送の「社へ」——原文発送——

〔受信者〕市外板橋中丸／二六六／石井鶴三様

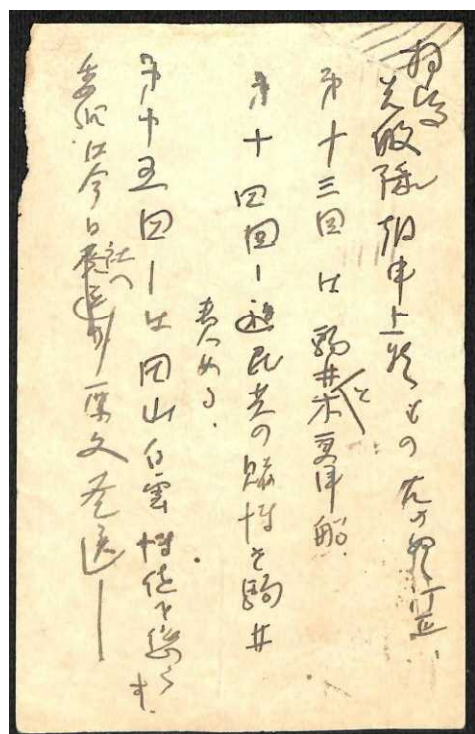
〔発信者〕東京□込早稲田／鶴巻町／中里弥之助

〔日付け〕九月五日

〔消印〕□稲田／14・9・5／前10—11

〔註〕

(1) 書簡22を指す。そこで指示のあった三回分の訂正連絡。



書簡24 (高1—261)

葉書 毛筆

《本文なし》  
《絵葉書の写真<sup>(1)</sup>上部、下部に印刷。上部は木曾節。下部は写真の説明。》

拾せナア—

ナカノリサン

拾せばかり

ナンチャラホイ

やられもせよい

ヨイくく

襦袢ナア—

ナカノリサン

襦袢仕立て

ナンチャラホイ

足袋そえて

ヨイくく

(木曾踊) 木曾節 其二

〔受信者〕市外板橋町／中丸二六六／石井鶴三様

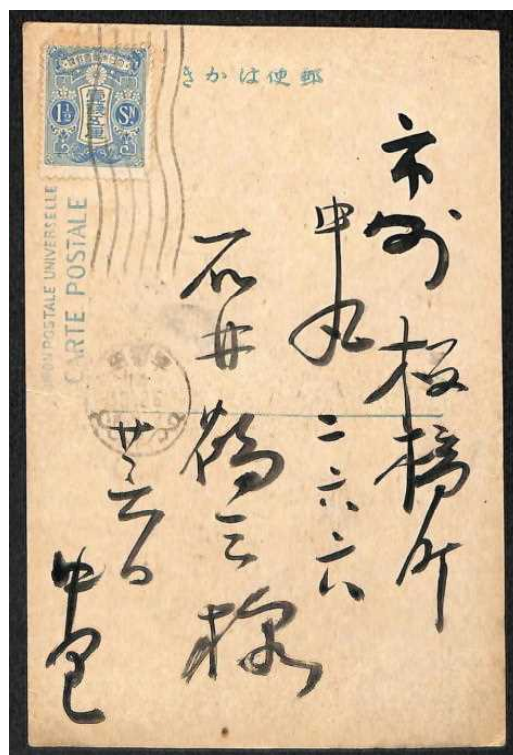
〔発信者〕中里

〔日付け〕二十六日

〔消印〕早稲田／14・9・26／前8—9

〔註〕

(1) 「他生の巻(三十二)」(大正十四年十月四日夕)掲載の挿絵の構図は、この絵葉書の写真の構図を踏襲している。該当回は、お雪が龍之助に促されて、白骨の温泉場の座敷で踊る老若男女を観る場面で、歌詞も掲載されている。





書簡25 (高1―23)

封筒欠 巻紙 毛筆

お手紙拝見原稿の方はつとめてお間に合はせませう。

画会の件も至極おもしろい企と存じまた有益なる刺戟ともなりませうが、小生として一つ打ち明けて申せば不快な事は報知の白井君<sup>1</sup>といふ人は小生●の摸<sup>マ</sup>倣<sup>バ</sup>ばかりやりたがる人で、それをまた文壇の或種の尻押しがわざと小生と比較しどちらがどうかのかうのと弥次をやつてゐる心事が日頃浅ましいと思つてゐる処へ、二つだけ並べて新らしい試みの画会を開くといふその事が小生には不快なのです。イヤに思ひます。

右と同列でなく、他に新顔が加はるか或は貴下単独でおやりになるならば少しも異議はございません、木村莊八氏に対しても敬意を持つて居りますが、たゞ白井といふ人及びその背後の弥次が大嫌ひなのです。

この点を一つ御考慮願ひたいと存じます

先は取り敢へず早々 不備

大正十四年

九月三十日

中里生

石井画伯 御中

二伸

それはそれと致しまして、小生から別にお願ひがあるのですが、「無明の巻」と「白骨の巻」も近々出版<sup>2</sup>にとりかゝる筈ですが、貴下の御作物のうち十枚ほどを巻頭に掲げさせていたゞきたいのです、新聞掲載のうちから選択させていたゞけば結構ですが、新たに御執筆あらばそれを利用させていたゞけば尚ほ有難うございます微力の小生ですがもし、小生の力で頂戴できるならば家宝として備へたいとも存じて居ります。

高尾の艸庵を引はらひ、

武州御嶽山の麓<sup>3</sup>へ茅屋を

結ぶ事になりました先は

大正十四年九月三十日夜

中里生

石井鶴三様

侍史

〔註〕

(1)『報知新聞』に「富士に立つ影」を連載していた白井喬二(小説家、明治二十二年〜昭和五十五年)のこと。白井は『大衆文芸』を創刊し、その先頭に立った。伝奇性の強い作品を多く書き、大衆文学の質的向上にも寄与した。

(2)「無明の巻」、「白骨の巻」、「他生の巻」を収めた、中里介山『普及版大菩薩峠 第五集』(春秋社、大正十四年十一月)には、三枚の鶴三挿絵が掲載されている。

(3)四月に、高尾山妙音谷草庵裏にケーブルカー建設その他の問題が起こ

り、煩わしさのため草庵を引き払い、奥多摩御岳山麓、三田村沢井に移し黒地藏文庫と称し入庵した。

わすれぬ久一筆の方ばかりであつてお問ふ金はせま  
せう。  
画室の件もそれともしろい金と存下。また有  
益なるお紙とせう。せうか。望して一つお  
明し申せば不快な事は親友の自井と云ふに  
人よ。小室の模倣ばかりやりなかつて、それと云ふ  
文壇の或種の反押しが、おとせと云ふに比較し、ど  
うか。その方とせう。評定をすつてある人より、か  
れ評定し、いとあつてゐる。あつて、こゝろなり、並べ  
おとせ、試みる画室と聞くと、いよそのやうな  
う。おとせ、いよそのやうな。

石と同あへなく、他は物類ばかりか或は  
貴つて甲種がふやりにあるが少しも堂座  
にはないよさん、木お花八日に出してもね  
えを指して言うまうか、てい、白井といふ人  
なにより北村のほかに大嫌ひなのさう。  
このまゝ一つは老衰死のたれとなしとう  
文はちねつりやう。

不審

不備

九月三十日

中國

不井

[illegible]

高松の柳をとりはじむ  
山より最山の松をへき  
指上よりよりし  
天白

三才圖會

石井 昭

15

## 書簡26 (書6—32)

葉書 ペン

今日三十七回目から四十回までを社の方へ廻しましたが要点は

第三十七回——後家さん<sup>(1)</sup>と男妾と<sup>(2)</sup>こたつに話して

ゐる処へお雪ちゃん<sup>(3)</sup>が来る。三人<sup>(4)</sup>こたつに「向ひ合つての会話

第三十八回——お雪廊下で障子の外に立つて立聞

思はず立聞<sup>(4)</sup>をする、

第三十九回——林の中で男妾の浅吉が木の枝へ

紐をかけて縊れ死なうとする——それを●花を取りに●●

行つたお雪が認めて救ひに行く、

第四十回——お雪が浅吉をつれて谷間の小さな橋を渡つ

てふりかへると、山の上の坂道から小さく笠の人が四五人見え

る

これはいつかの神楽師<sup>(4)</sup>

〔受信者〕市外板橋中丸ノ二六六ノ石井鶴三様

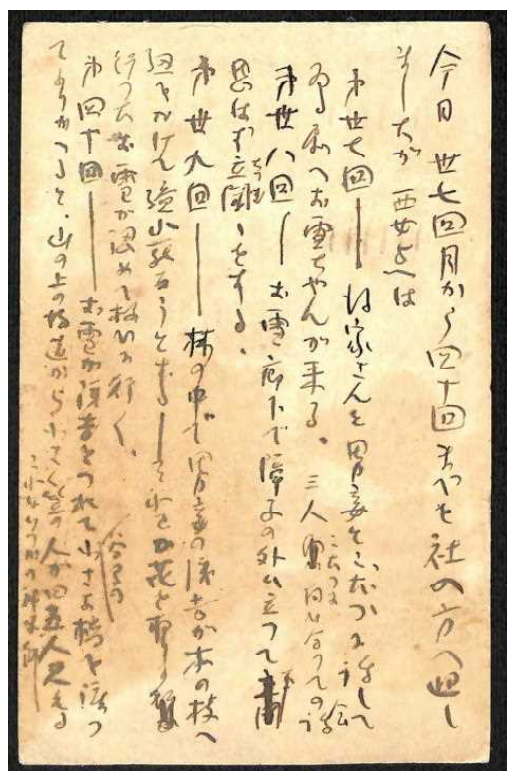
〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田ノ□巻町□□□ノ中里弥之助

〔日付け〕十月二日、

〔消印〕早稲田ノ14・10・2ノ前8—9

〔註〕

- (1)「他生の巻(三十七)」(大正十四年十月十日夕)掲載。「他生の巻(三十二)」(大正十四年十月四日夕)で木曾節で首頭を取っていた女性。人殺しの経験を龍之助に語る。のち浅吉が水死してまもなく、同じ場所で見殺しにされるのが発見される。該当回の挿絵の指示が、書簡24にみられる。
- (2)「他生の巻(三十八)」(大正十四年十月十一日夕)掲載。後家さんの男妾、浅吉。後家さんの派手な男性関係に抗議するも一蹴され、「他生の巻(三十九)」で自殺を図るもお雪に救われる。後に無名沼で水死する。
- (3)「他生の巻(三十九)」(大正十四年十月十三日夕)掲載。月見寺の娘。巢鴨庚申塚で龍之助に救われたお若は、義姉である。龍之助の目を治すため、ともに白骨温泉に向かう。後に龍之助と心中未遂をする。
- (4)「他生の巻(四十)」(大正十四年十月十四日夕)掲載。「笠の人」が神楽師かどうかは、この回では書かれていない。神楽師は、「白骨の巻」で高尾山の宿坊にて七兵衛が出会い、「他生の巻」で三田四国町の薩摩屋敷にて飛騨の国勢を説いていた一行。うち一名は池田良斎という国学者で、お雪に請われて歌を教える。



「他生の巻 (39)」



「他生の巻 (37)」



「他生の巻 (40)」



「他生の巻 (38)」

書簡27 (高1—16)

便箋 ペン

只今帰京

お手紙拝見

御画稿写真乃木版御不満の点もござ

いませうが、御かんべん願ひます。

御意見のほど御尤もに存じます。

大菩薩行、紅葉はトモもだめですから

初冬の期気透徹して展望のきく時を

択びたいものです、

御画稿の残り木版の印今小生の処に

お預かりしてあります。そのうち御返し

申上げます。

また小生の為に特に五枚ほど御揮毫下

さいませんでせうか。旧来の稿本でも結構

新たに執筆下されば尚ほ結構ですが

新居奥多摩川の上流へ大菩薩に関する小博

物館のやうなものを建てます、その記念の意味

で御願ひ致したうございます。

中島さんへもよろしく、

先は取り敢へず……、

十一月二十四日

中里生

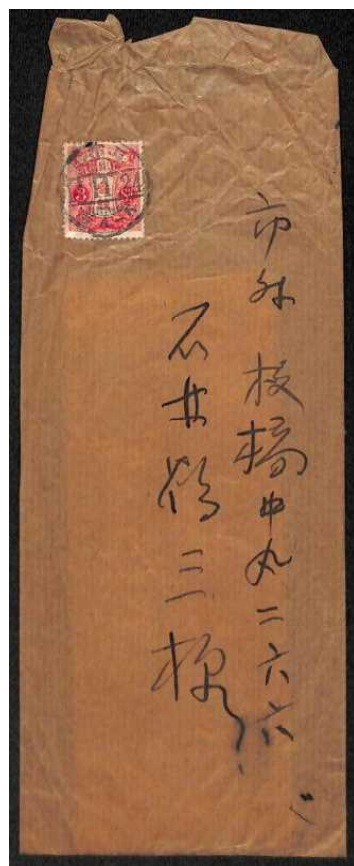
石井様

侍史

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様  
〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町□□□／中里弥  
之助

〔日付け〕十一月二十四日

〔消印〕早稲田／14・11・24／后4—5



No.

只今帰京  
 又よおね  
 昨西稿富々お版に不満のよしとい  
 いしやうか。ゆかんべんねいす。  
 日暮るはむげんしと存います。  
 大昔行に幸はともむめてふ  
 初めの御氣遠遊して居るのすく時を

押へたいとつす。  
 昨西稿の誤り本はのり今もふふ  
 ははかりしと存います。さうさうはまし  
 甲上ります。

まえさうめん特に五枚はむは押さへト  
 せりよとせうか。旧来の稿本とは相  
 違はん。お下さしおはは相違ひすが  
 みな奥もさういふへ大昔たう固す。さう

No.

ね館のやうなものを集めては余のまゝ  
 でけねいぬしとていひます。  
 中島さんへさうしく。  
 先は取りぬす。  
 土月廿四日。  
 中島

石井  
 ね  
 さん

書簡28 (高1—13)

便箋 毛筆

拝啓

画会<sup>(1)</sup>の件アナタの方はトニカク

私の方は大不賛成です。

西田<sup>(2)</sup>といふ男アレは純然たる書画

屋で営業本位で利用するだけのものです。

一度会つて見ましたが問題になりませ

ん。―且、約束に違つたやり方を

してゐます。

トニカク、おやりなさるならおやりなさい。

小生はドコまでも不賛成で、かりそめにも

自己の作物を営業と悪意とに

利用されたことを覚えてゐます。

また小杉<sup>(3)</sup>氏が講談物などを平気で

執筆する良心の欠けたことをな●げ

き貴下や木村<sup>(4)</sup>氏の如き人が、こんな種類

の展覧を甘んずるのを甚だ遺憾と致します。

先は  
十二月十三日

石井鶴三様

中里生

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町□□□／中里弥

之助

〔日付け〕十二月十三日

〔消印〕□□／14・12・13／□10—11

〔註〕

(1) 挿絵原画を展示した墨画小品展(大正十四年十二月十五日—二十四日、室内社)で、木村莊八『富士に立つ影』、小杉未醒『清水次郎長』(伯山講談)、石井鶴三『大菩薩峠』が出品された。

(2) 西田武雄(明治二十七年—昭和三十六年)、版画家。本郷美術研究所で岡田三郎助に師事。大正十四年、画廊「室内社」をひらく。エッチングの普及にも努め、『エッチングの描き方』(木星社書院、昭和五年五月)等の著書もある。

(3) 小杉放庵(明治十四年—昭和三十九年)、画家、歌人、随筆家。旧号、小杉未醒。明治三十三年吉田博に感化され上京、小山正太郎の不同舎に入る。明治四十一年文展初入選。大正十一年春陽会を結成し、以後、日本画の制作が中心となる。

(4) 木村莊八(明治二十六年—昭和三十三年)、洋画家、随筆家。生家は牛鍋屋いろは。白馬会葵橋洋画研究所に学び、岸田劉生と交友。大正元年フユウザン会展でデビュー。大正十二年に春陽会会員となる。白井喬二『富士に立つ影』、大佛次郎『霧笛』など新聞小説の挿絵で名声を博し、永井荷風の『濃東綺譚』で頂点に達した。随筆でも健筆をふるった。

坪倉  
 画會の件アナタの方にはトニカク  
 利の方は大不意な故です。  
 西田といふ男アしは純然たる書画  
 屋で若草本位で利用するだけのもの  
 です。  
 一々金をつたえしとか問題にすりま  
 へ。——且、約束の違つたやり方を

十二月十三日

市外板橋中丸二六六  
 石井信三様

No.  
 石井信三様  
 十二月十三日  
 中丸  
 の展覧をかんがうをまだ遠慮  
 と致しき。先は

No.  
 しておきます。  
 トニカク、ふやりのさうふやりのま  
 い。  
 山本はドウも不意な故で、かりとめま  
 も自分の作品を言葉と要とと  
 利用して、トニカクを宛てておます。  
 土井や松氏が遠慮をいれとすまや  
 展覧する旨の欠けたことを多  
 引、貴下や本お自の如き人が、えと後

## 書簡29 (高1―15)

便箋 ペン

今日山より帰来お手紙拝見。

もう一応小生の意志を申上げて置きます。

今回の小生の所見は画家としては貴下の人格を信じ作物としては或物との並列を嫌ったのです。

現時の文壇のある空気には小生の作物を誣いんとして一種のたくみを持つ者が多い。小生は彼等の卑劣を患にくんでゐる。―これは決してひがみではない。

小杉氏が講談物を執筆する動機は知らないが、若し同君が「西遊記」<sup>(1)</sup>の如きものを執筆して個々の人物を表現させたら非常に面白からうと思ふ。さうでもあつたら小生も首肯したかも知れない。バクチ打ちだか俠客だかさういふものを描いて何の抱負があるのですか。オレほどの大家が斯ういものを執筆して見せるといふフザけた気持なら論外です。

兎に角小生は作物を他の目的の為に利用されることを絶対に不可とします。

今回の事は貴下の人格を信じたもので貴下の為ならば甘んじて縁の下の方持でも何でもつとめやうと思つた精神が西田にわからなかつたのです。

今後はどうか此の点を御諒察下さい。小生は

読物とする●以外には演劇、映画、その他すべての複製を謝絶してゐます。

西田には何を云つてもわかるまいから貴下にだけ

これを申上げて置きます。 先は

十二月十八日

中里生

石井様

侍史

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町三百／中里弥之

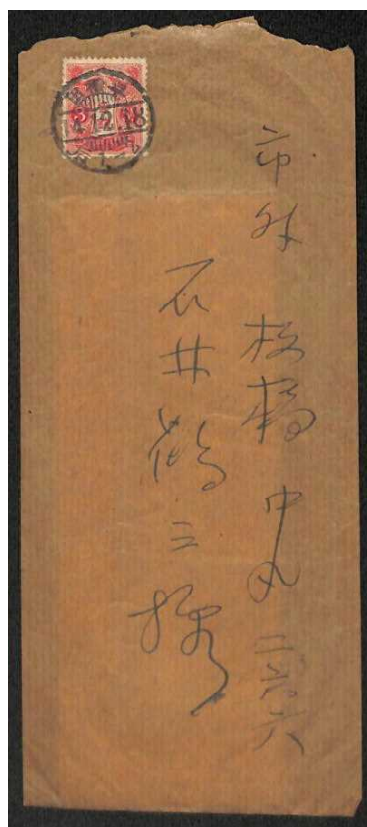
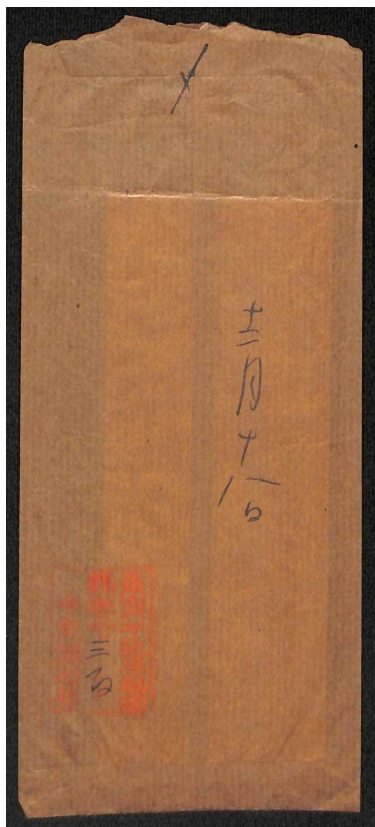
助

〔日付け〕十二月十八日

〔消印〕早稲田／14・12・18／后1―2

〔註〕

(1) 中国、明代に完成した長編の口語体章回小説。世に四大奇書の一つに数えられ、校閲者は「華陽洞天主人校」と記されるが未詳。墨画小品展に小杉放庵は「講談清水次郎長挿画十二枚」を出品している。なお、放庵訳・画による『新訳絵本西遊記』（左久良書房、明治四十三年一月）もある。





書簡30 (高1—259)

葉書 ペン

拝啓 来春夕刊

大菩薩峠流転の巻第一に現はれる

碓氷峠の風車<sup>(1)</sup>は

《図。以下、図のところどころに加えられた説明を翻字》

東国の平原

黒木柱柱

格子の手スル

峠ノ宿ノ人家

●苔かハエテキル

源氏車ノヤウナ紋

石

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町300／中里弥之助

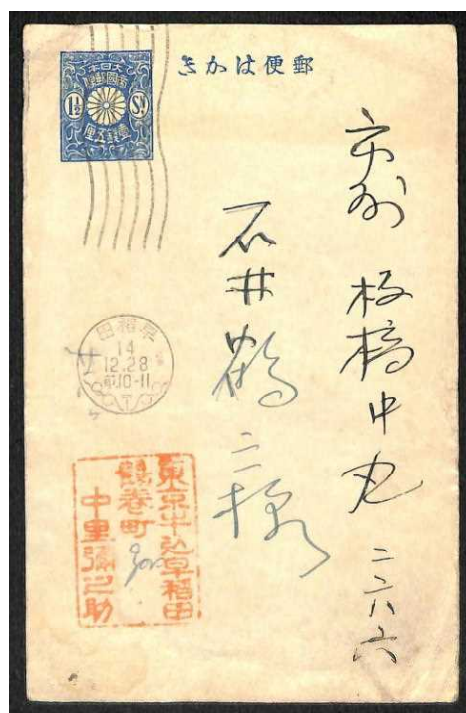
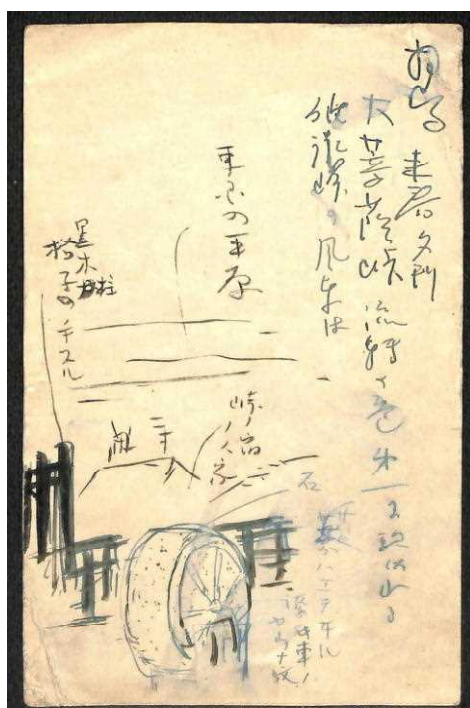
《「300」はペン書き》

〔日付け〕二十八日

〔消印〕早稲田／14・12・28／前10—11

〔註〕

(1) 碓氷峠は、現、群馬県安中市松井田町坂本と長野県北佐久郡軽井沢町



の境にある峠。この風車は石製で、人間が回すものである。ここに米友が凭れて、道庵を待っていた。「流転の巻(一)」(大正十五年一月五日夕)掲載。



「流転の巻（1）」

## 書簡31 (高1—14)

便箋 ペン

拝啓

大菩薩<sup>(1)</sup>行にお誘ひ下され有難く存居候  
此度小生はこの休養<sup>(2)</sup>を利用して漫遊を  
企てることになつて居りますので折角ながら

出かけられないのを遺憾とします。  
併し往返の途次沢井<sup>(3)</sup>へお立より下さらば  
留守番の者に申つけて置きます。

また中島兄の手によりカメラが一枚頂戴出  
来て、それを今度出版の巻頭に飾ることが  
できざいますが

出来れば甚だ嬉しく存じますがよろしく御伝  
へを願ひます、

今朝これから出かけるのです、

先は勿々乱筆御免

五月二十三日

中里生

石井様

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴巻町三百／中里弥之

助

〔日付け〕五月二十三日

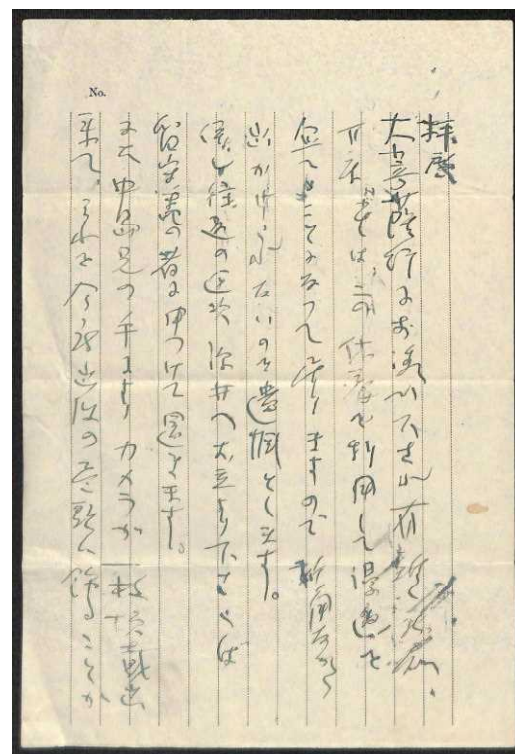
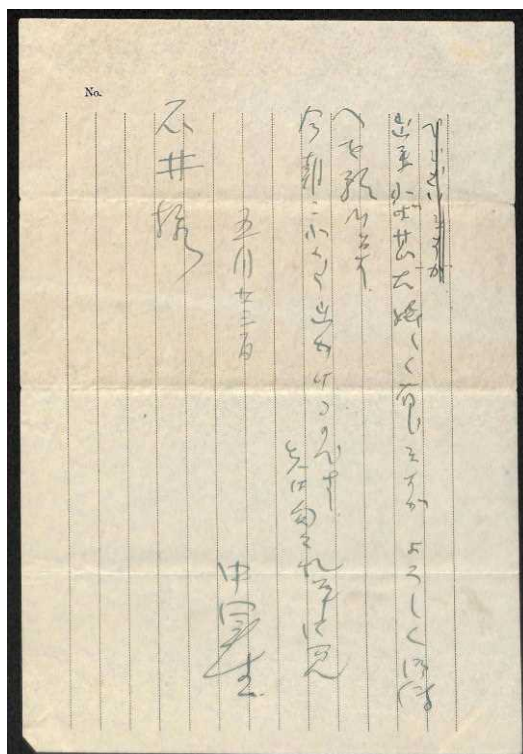
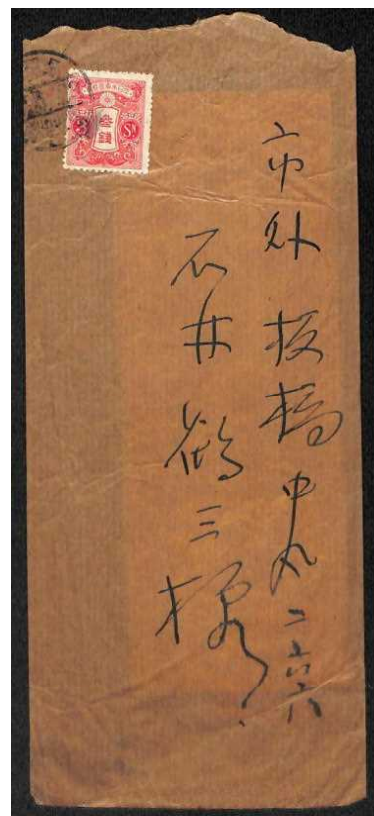
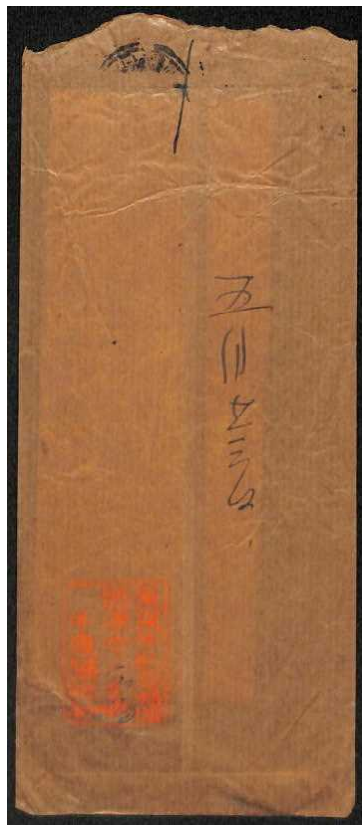
〔消印〕早稲□／□・5・23／前7—8

〔註〕

(1) 鶴三は、大正十五年五月、御岳山麓に中里介山の小滝道場を訪ね、その後、大菩薩峠登山をした(『石井鶴三日記 第一巻』形文社、平成十七年三月)。

(2) 五月二十三日が『大菩薩峠』連載の途切れている年、と考えると、「流転の巻」(大正十五年一月五日～五月二十日)・「みちりやの巻」(大正十五年七月十三日～十月二十一日)の間かと推定される。この推定に即せば、書簡制作年は大正十五年となる。

(3) 現・東京都青梅市の地名。『大菩薩峠』冒頭の舞台であり、机龍之介は沢井道場の若師範という設定。介山は大正十四年、この地に庵を結んだ。



書簡32 (高1—257)

葉書 ペン

拝啓 今日稿を東日社新妻君の  
方へ廻しましたが、トモカク船を進めて  
見やうと存じます、平穩なやうで、  
突風と暗礁の上に沈没水雷まである  
航路かも知れません——併し  
大兄の方は絶対安全です。先は  
よろしく

七月初日、

《差出人の面に、鶴三のものと思われる鉛筆のメモ書きあり。》

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《朱方印》東京牛込早稲田／鶴卷町三百／中里弥之

助

〔日付け〕《記載なし》

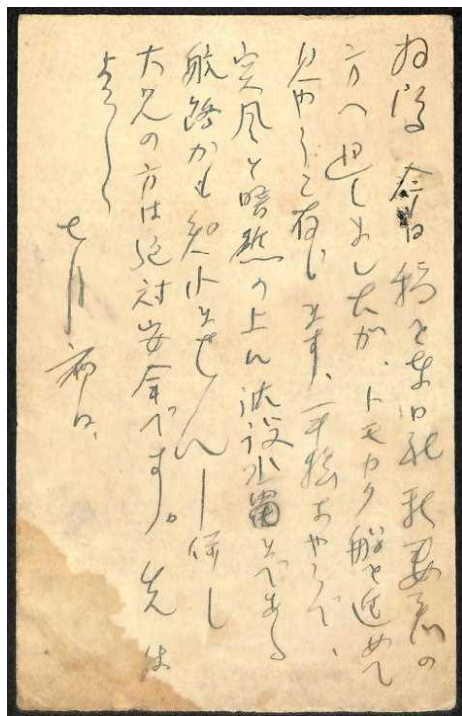
〔消印〕早稲田／15・7・1／后7—8

〔註〕

(1)『大菩薩峠』『みちりやの巻』（中里介山『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』大正十五年七月十三日夕／十月二十一日夕）と思われる。

(2)新妻莞（明治二十四年／昭和四十八年）。大正九年大阪毎日新聞社に入社、昭和四年に学芸課長、『サンデー毎日』編集長を務め、昭和六年より東京日日新聞に異動、整理部長兼学芸部長となる。大正十二年九月に発

行開始した『東京日日新聞』の夕刊で増大した部数を固定するため、『大阪日日新聞』と同紙掲載を条件に介山に『大菩薩峠』執筆を承諾させた。



書簡33 (高1—258)

葉書 ペン

拝啓〔復〕 山陰道の中里某なるもの<sup>(1)</sup>戸籍上の同名異人ならば是非なし偽物ならば叩きノメすやうに御返事を乞ふ

大正十五年七月三十日

中里生

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

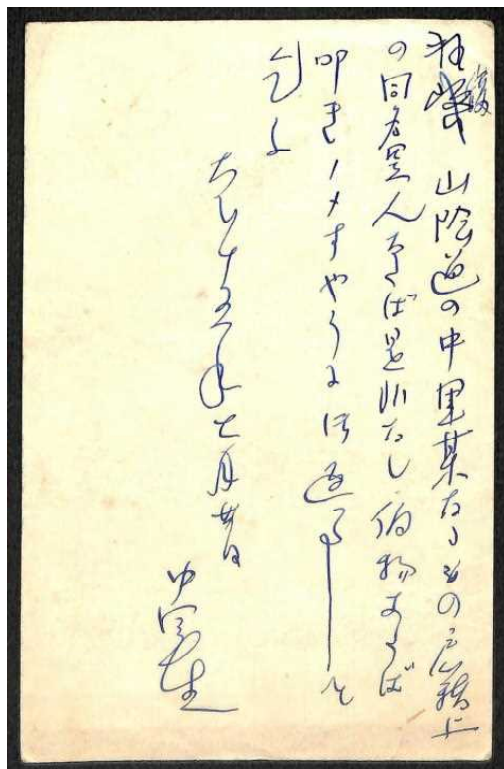
〔発信者〕《記載なし》

〔日付け〕《記載なし》

〔消印〕早稲田／15・7・30／前8—9

〔註〕

(1) 柞木田龍善『中里介山伝』(読売新聞社、昭和四十七年三月)によれば、島根県大原郡大東町の祥雲寺に介山を騙る人物が現れ、同地の竜法寺に住み込みたいと申し出た旨記述がある。



## 書簡34 (書7—969)

葉書 ペン

拝啓 北海道からお帰りになりましたか  
 山の家は千円の少し上かゝりましたが千  
 円以下でお譲りしても宜敷う御座ります  
 それも一時でなくともよろしう御座ります  
 若し御入用なければ此秋取壊して移  
 転させ様かと思ひます併し折角の  
 事にあすこえ置いて利用する物があれ  
 は幸いです

中里

「受信者」市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

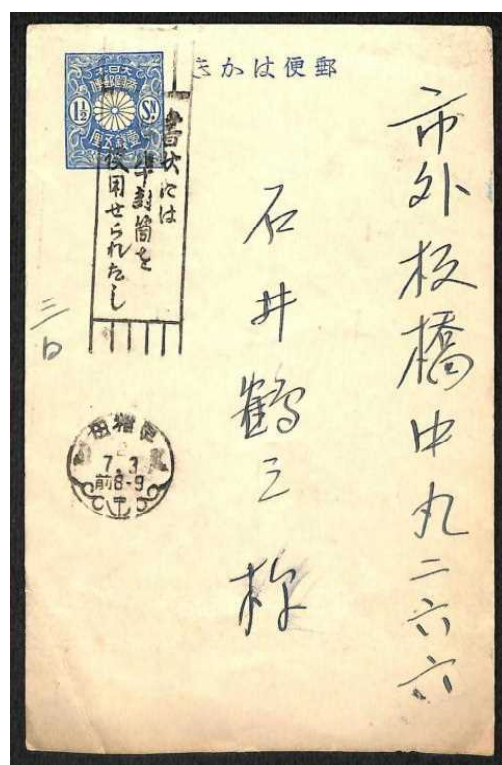
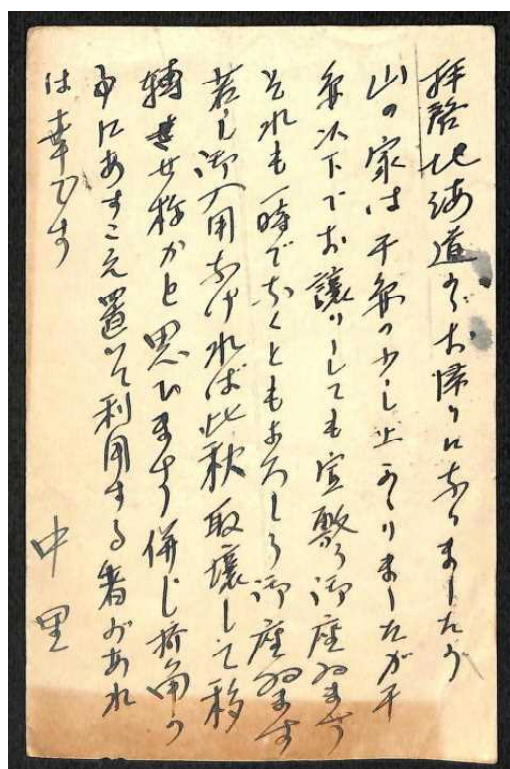
「発信者」《記載なし》

「日付け」三日

「消印」早稲田／2・7・3／前8—9

〔註〕

(1) 大正十四年に移した多摩郡三田村沢井の黒地蔵文庫草庵、もしくは昭和二年一月に建てた谷久保沢の八雲谷草庵か。



書簡35 (高1—12)

便箋 ペン

拝啓 過日は失礼仕候 就ては今回隣  
人之友社にて大菩薩峠絵はがき<sup>(1)</sup>を發行致し  
度候処写真と取り合せて貴下に御意匠を願  
度候へ共如何に候や尤も隣人社の事業なれば  
世間の出版社の様には商売的にはまゐらざる  
べしとは存候へ共 印税制度にして貴下に報  
酬を呈するやう●〔に〕仕度存候御承諾下され候はゞ  
至急に取り運びたく、まづは御伺ひ申上候  
三月五日

中里生

石井様

第一集一組六枚の予定に候

〔受信者〕 府下板橋中丸ノ二六六ノ石井鶴三様

〔発信者〕 《印》 東京府下西多摩郡三田村沢井 隣人之友社ノ

東京市牛込区早稲田鶴巻町三百 遊於舎ノ中里弥之助

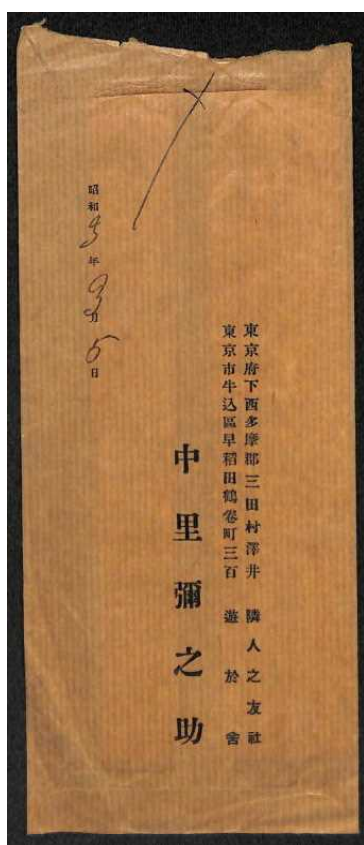
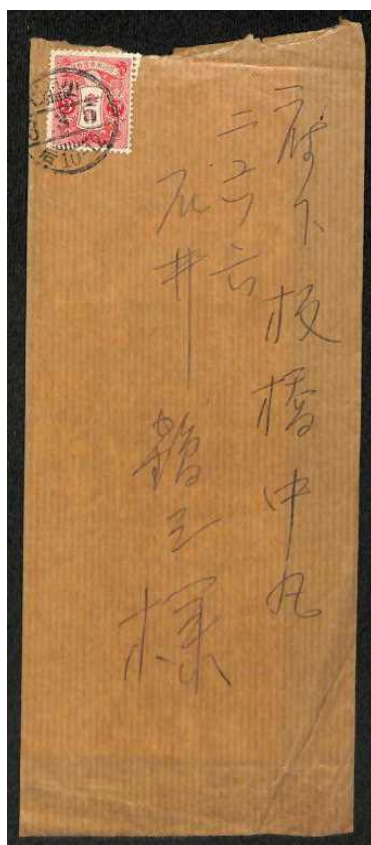
〔日付け〕 昭和三年三月五日

〔消印〕 小石川ノ<sup>3</sup>・3・5ノ后10—12

〔註〕

(1) 『大菩薩峠』各回の一節を印刷した絵はがき。書簡37 (昭和三年五月四

日付け石井鶴三宛書簡)に、早速「甲源一刀流の巻」の絵葉書が使われている。



有終 是言は分限し所、  
 人々並にこれ大慈恵院師 縁由。其いふ者わかし  
 度、不 留意と云ふ所、廿九歳下には嘉正壬辰  
 亥の(昔)好なりなり。尤も隣人此のつゝあるは  
 己身の上故に、此の所よりある受取は、わがふも  
 べと云ふ、(我)中腹あふたふと云ふに、報  
 酬を是するや、如何なる、此の縁より、わがふの  
 分限より、而り違ふな、す、わがふの分限より、  
 中 包 ぬ

## 書簡36 (高1—11)

便箋 ペン

拝啓 大菩薩峠の続稿<sup>(1)</sup>の挿絵を御依頼する事に小生からもお願いし新聞社<sup>(2)</sup>

からも御承諾を伝へると思ひますが、

実は近來新聞社で(小生の原稿は豊富に

送つてあるにかゝはらず)ほとんど理由なしに、また

ことわりなしに、あゆ<sup>(3)</sup>る)●一種の意志を以て度々

休載することあり、その間の暗流と手順とを

看取するに難からず、よつて小生としては

新聞社の誠意をもう少し認めた上で無ければ

筆を進められない立場に居ります(或は小生

をして、さういふ心持にさせる事が社の手か

も知れませんが)

とにかくさういふ次第で、小生は健康も執筆も

少しも窘<sup>3</sup>窮したとは思ひませんが、無期

休載のつもりで休んでゐるのが当然の立場にあ

ることを御諒解願ひます。

随つて貴下にも自由行動を取つていたゞくより

外はなく、その責任は断じて小生に無きことを

申進して「表明して」置きます。

拝顔の節万端申上げたく存じますが先は

四月九日

中里生

石井様

〔受信者〕市外板橋中丸二六六／石井鶴三様

〔発信者〕《印》東京府下西多摩郡三田村沢井 隣人之友社／

東京市牛込区早稲田鶴巻町三百 遊於舎／中里彌之

助

〔日付け〕昭和三年四月七日

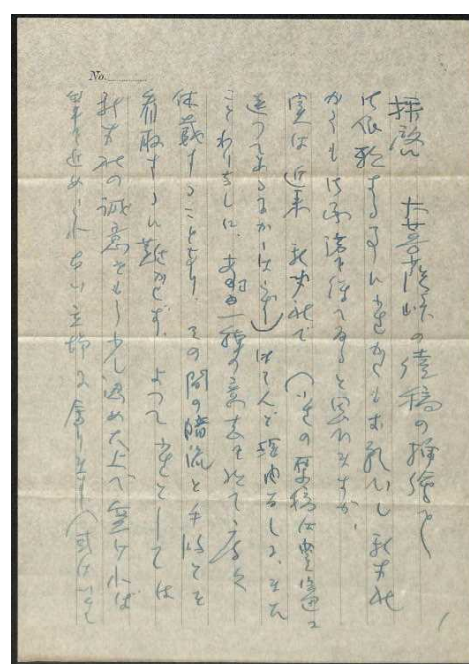
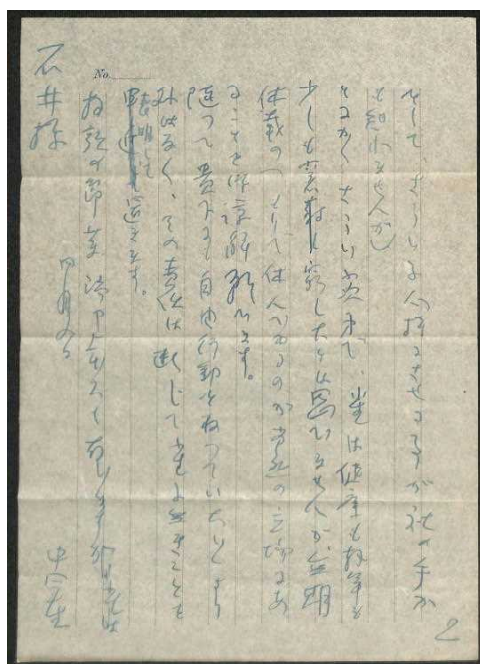
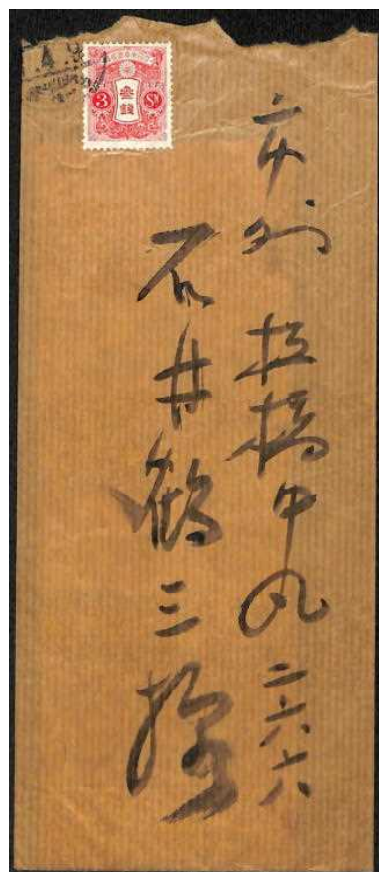
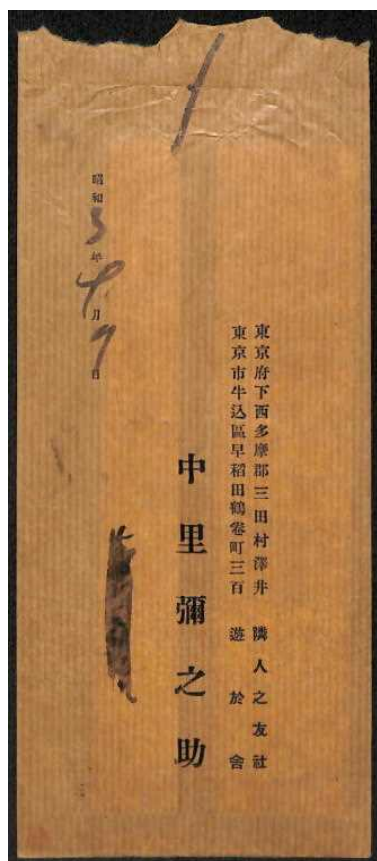
〔消印〕□□／□・4・9／前8—9

〔註〕

(1)『大菩薩峠』『めいろの巻』がこの日四月七日に完結。「続稿」は「鈴慕の巻」で、昭和三年五月二十二日より連載された。

(2)「鈴慕の巻」は『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』掲載。

(3)「めいろの巻」には事実しばしば休載があるが、介山「自家年表」(尾崎秀樹『中里介山 孤高の思索者』昭和五十五年十月、勁草書房)昭和三年の項に「〇四月ごろ新聞に於て大菩薩峠を故意に休載することあり、不快なるを以て執筆せず」と書き込んでおり、連載終了が四月七日であることを考えあわせても、具体的にどの休載を指すのかは不明。もともと、たとえば昭和三年十二月四日から翌年六月十八日まで『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』両紙に連載された谷崎潤一郎『蓼食ふ虫』なども休載は多い。「Ocean」の巻」連載終了(昭和三年九月八日夕)後、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』両社と介山との関係は途絶えた。続く「年魚市の巻」は雑誌『隣人之友』に掲載。



書簡37 (高1—256)

絵葉書 ペン

《葉書裏》

拝啓 昨日東日社の岡氏<sup>(1)</sup>

と会见近々執筆するやう

になりました<sup>(2)</sup>からよろしく願

ひます

それから近日高橋空山君<sup>(3)</sup>

が貴君を訪問致す筈でござい

ま●す

が御

多忙

中

引見を

願ひます、同君は(以下次頁)

《葉書表》

札幌出の農学士で、

尺八の名手であります、

同君から「鈴慕」の一曲<sup>(4)</sup>

をお聞き下さるやうに、

また同君が書き捨て

の下絵一枚を無心しまし

たら特に割愛してやつ

て下さると有難く存

じます 先は、

中里生

《絵葉書の写真下部、上部に印刷。上部は『大菩薩峠』『高原  
一刀流の巻』の一節が引用されている。》

〔受信者〕東京市外／板橋中丸266／石井鶴三様

〔発信者〕《印》府●多摩郡／三田村沢井／隣人之友社／黒地

蔵文庫

〔日付け〕《印》昭和参年五月四日

〔消印〕□□／3・5・5／前0—□

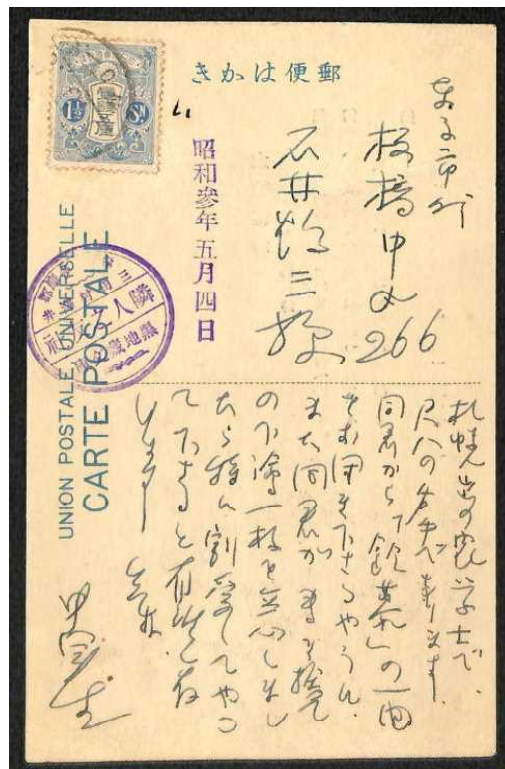
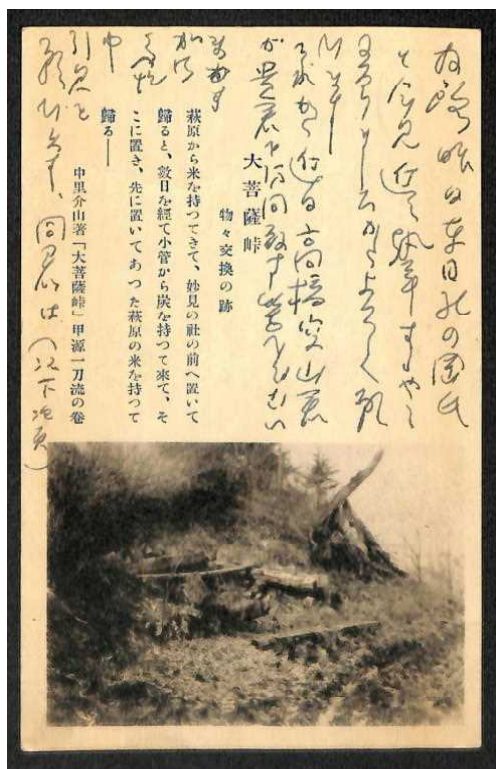
〔註〕

(1) 東京日日新聞社の岡實(明治六年～昭和十四年)。

(2) この後、二十二日より『大菩薩峠』『鈴慕の巻』連載開始。

(3) 高橋空山(明治三十三年～昭和六十一年)は普化流の尺八の名手。昭和二年十一月二十九日『東京日日新聞』には、介山との出会いを紹介した記事が載る。「めいろの巻」中にも名前が挙がり、『大菩薩峠』映画化の際には出演もしている。

(4) 尺八の曲名。



書簡38 (高1—17)

便箋 ペン

拝啓 その後は御無沙汰仕候

そのうち、龍之助山行の処<sup>(1)</sup>あり右<sup>(1)</sup>の

場面だけ超現実的に、頭髮を

《図》

こんな風の、カツラでいへば菊百<sup>(2)</sup>日と  
いったやうな下げ髪<sup>(3)</sup>にし、  
服装<sup>(3)</sup>を行者風か六部<sup>(3)</sup>いでた  
ちにでもしたらどんなもの

でせう。

それから立山連峰の剣嶽にあつたといふ、

御承知の事と思ひますが、錫杖の頭の

残存してゐるもの<sup>(4)</sup>

《便箋上部右に和紙貼付。宝物の図あり。以下、和紙に記入された文面》

宝物

1 / 4

モトは

六大の

環がついて

ゐるのでせう《和紙の文面ここまで》

御隠栖の処もあるかも知れませ<sup>マ</sup>ん一度

お出かけになりませんか、御案内します、

併し前以て

御一報を願ひます

不在勝ですから。

先日阿蘇を

見て参り

まし

た、

雨があがつたら日本アルプスをやるつもりです、先は<sup>(5)</sup>

山にて 中里生

石井様

〔受信者〕東京市外板橋中丸<sup>266</sup>／石井鶴三様

〔発信者〕《印》東京府下西多摩郡三田村沢井隣人之友社／振

替東京七五三三一／東京市牛込区早稲田鶴巻町三百  
／遊於舎／電話牛込三五三九／中里弥之助／山<sup>《ペン》</sup>にて

〔日付け〕昭和3年7月5日

〔消印〕東京・沢井／3・7・5／后0—3

〔註〕

(1)「鈴慕の巻(四十四)」(昭和三年七月十二日夕)、「鈴慕の巻(四十六)」  
(昭和三年七月十四日夕)に、白骨温泉で療養中の机龍之助が夢に白馬  
山頂に立つて槍ヶ岳・穂高の連山を眺める箇所がある。以下の龍之助の  
扮装は、挿絵では手紙の通りに描かれた。

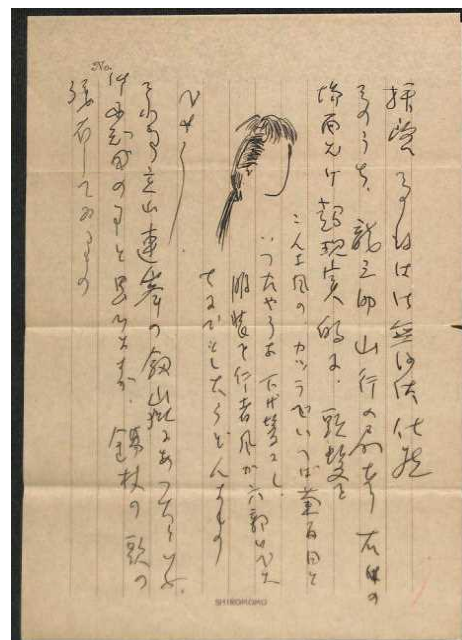
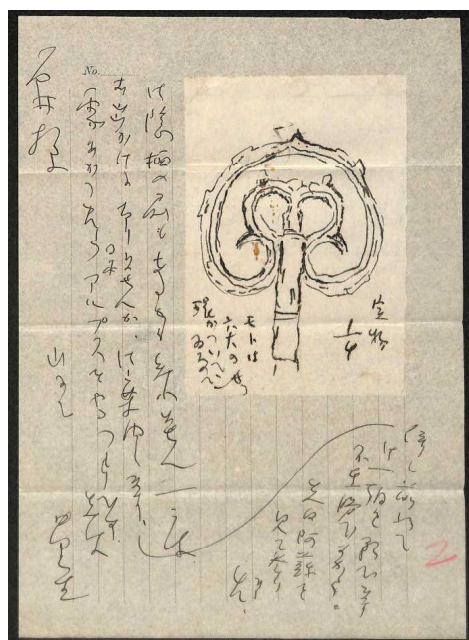
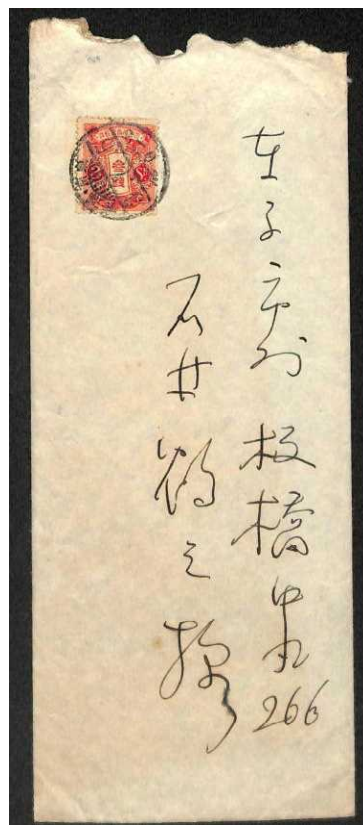
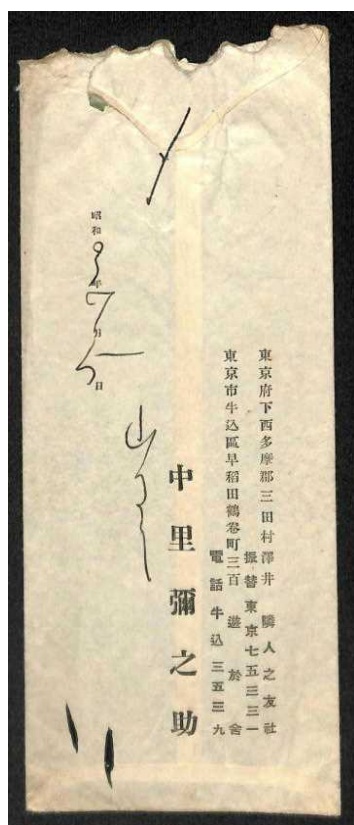
(2)百日鬘は髪を長く伸ばした髪型の鬘。芝居では盗賊などの髪に用いる。  
菊百(菊百日)はこれを菊の形に固めたもの。

(3)もとは六十六部書写した経を持つて六十六箇所の霊場を廻る巡礼を指  
す。「行者」とともに、巡礼風の身なりを指定。

(4)明治四十年、陸軍参謀本部測量官柴崎芳太郎一行が、剣岳山頂で鉄剣

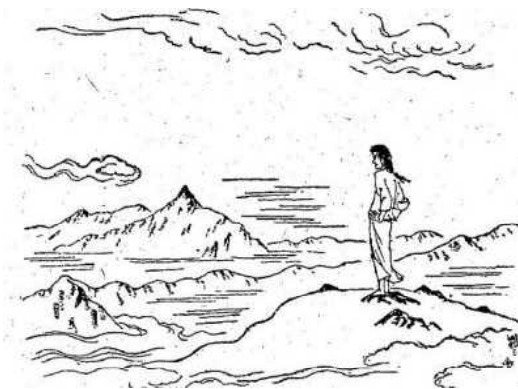
と錫杖を発見し持ち帰り、山岳信仰の古態を示すものとして話題を呼んだ。

(5) 白馬行の記事は介山の紀行文集『遊於処々』（隣人社、昭和九年七月）中「遊於片々」に見える。





「鈴慕の巻（46）」



「鈴慕の巻（44）」



「鈴慕の巻（45）」

## 書簡39 (高1—255)

葉書 ペン

《図》 小栗上野介<sup>(1)</sup>

定紋、

丸に三立波

御参考までに

中里生

Ocean 《紋の左上 横書き》  
第十五回頃<sup>(2)</sup>

〔受信者〕 東京市外板橋中丸ノ二六六ノ石井鶴三様

〔発信者〕 武州沢井にて

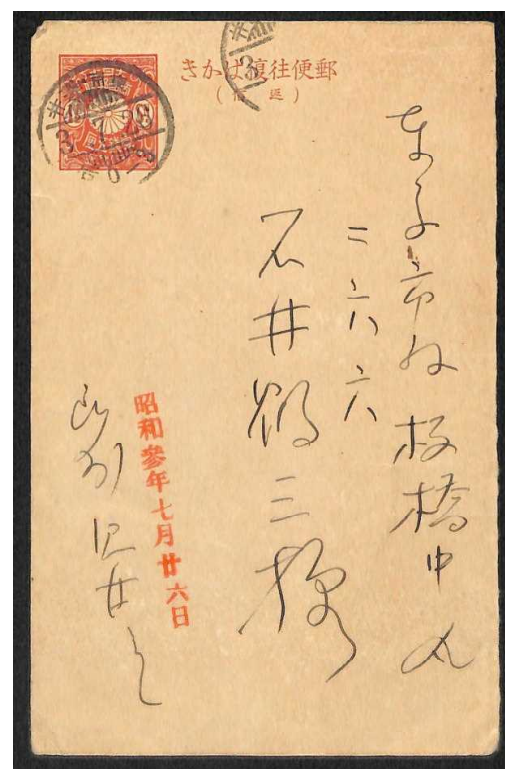
〔日付け〕 《印》 昭和三年七月二十六日

〔消印〕 東京・沢井ノ3・7・26ノ后0—3

〔註〕

(1) 小栗忠順（文政十年〜慶応四年）。開明派の幕臣として知られ、『大菩薩峠』作中では駒井能登守の後ろ盾として間接的に登場する。

(2) 実際には「Ocean」の巻（十七）（昭和三年八月九日夕）掲載の挿絵に、紋の図と小栗上野介像が用いられた。





「Ocean の巻 (17)」

## 書簡40 (書7—817)

葉書 ペン

前略 かねて御参考までに  
御送り申上候 沙翁全集  
古本<sup>(1)</sup>その他近々人を遣し候間  
お留守でも分るやうになされ  
置き下され度願上候

九月二十七日

匆々

〔受信者〕 東京市外板橋／中丸二六六／石井鶴三様

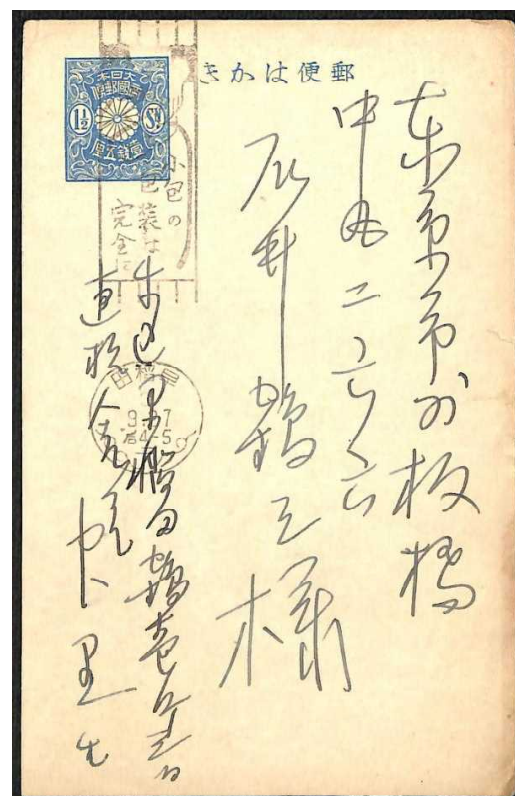
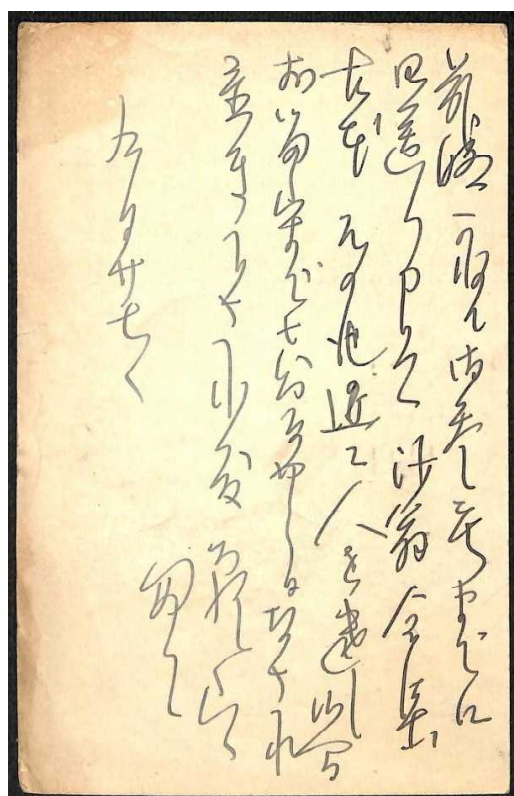
〔発信者〕 牛込早稲田鶴巻町三百／遊於舎にて／中里生

〔日付け〕 《記載なし》

〔消印〕 早稲田／3・9・27／后4—5

〔註〕

(1) 坪内逍遙訳『沙翁全集』(大日本図書、明治三十八年〜大正元年)。随  
処に挿絵を挿入した全集である。昭和三年には既に早稲田大学出版部に  
よる『沙翁全集』が再版されているが、「古本」とあることからして元版  
を指すと考えられる。



## 三、おわりに

以上が、信州大学所蔵「石井鶴三関連資料」から発見された、石井鶴三宛中里介山書簡の全貌である。まずは、このようなかたちでの公開を快諾して下さった、宮澤史彦氏に心よりの感謝を申し上げます。

中里介山に関していえば、近代文学研究においては『大菩薩峠』を中心に、コンスタントに研究・批評が発表されてきた。

近年では、中里介山著・井川洗厓挿絵・伊東祐吏校訂『大菩薩峠 都新聞版（全九巻）』（論創社、平成二十六年一月～平成二十七年六月）として、新たな本文提供の動きもあった。もとより、文学研究ばかりでなく、演劇や映画、出版文化といった隣接領域からの視座など、さまざまな観点から問題化し得る興味深い研究対象として、中里介山の重要性は疑い得ない。

また、石井鶴三ばかりでなく小村雪岱や鏑木清方などの挿絵、あるいは書物の装幀や雑誌の口絵など、文学と美術の関係を問題化する研究も、近年着実に進みつつある。もとより、美術史研究からの蓄積もある。

こうした研究状況に鑑みればなおのこと、ここで紹介した、石井鶴三宛中里介山書簡四十通がもつ意味は、単に新資料という以上に大きいはずだ。書簡に即した解題や射程については、出口智之「新聞小説と挿絵に関する問題系——「大菩薩峠」をめぐる石井鶴三宛中里介山書翰から——」を参照して頂きたいが、ぜひさまざまな興味関心から、本稿で紹介した書簡群、さらには「石井鶴三関連資料」をひろくご活用頂ければと思う。

最後に、ここまでの書簡調査に際しては、信州大学附属図書館のスタッフのみなさま、特に、折井匡氏、後閑壮登氏の厚いサポートを受け、また、書簡の画像データ作成は信州大学学術研究院（教育学系）の大島賢一氏のお力添えを得た。ここに記して、著者一同よりの謝意にかえさせて頂きます。

（松本和也）

\*本稿は科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号 16K02420）による研究成果の一部である。